とある侍の銀魂 (シルバーソウル)

白い奇術師

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある侍の銀魂　（シルバーソウル）

【Ｎコード】
Ｎ２８９４Ｙ

【作者名】
白い奇術師

【あらすじ】
これは銀時達がフェイト達と共にジュエルシード事件を解決したあとのお話。
銀時が今度いくところは科学が発展した都市、その名も『学園都市』。科学と魔術が交差するこの場所で銀さんは能力者と魔術師相手に大暴れ！

とある侍の銀魂　（シルバーソウル）（前書き）

新しい作品ですよろしくお願いします　ｂｙ作者

とある侍の銀魂　（シルバーソウル）

ここはかぶき町にある万事屋銀ちゃんという何でも屋。万事屋銀ちゃんで社長椅子に座り、ディスクの上に足を乗せ、ジャンプを見ている黒い服とズボンの上に着崩した白い青い波柄の着物を着た、銀髪天然パーマの死んだ魚のような目をした男性がいた。そうその人こそ、この万事屋銀ちゃんのオーナー『坂田銀時』ある。

銀時はこんなダメ人間ではあるが、知り合いのカラクリ技師がつくった転送装置で違う世界にいったさいに魔法少女と出会い、さらにはそこでとある事件を解決したのである。
今は元の世界に帰っている。ちなみにその装置、ここで働いてる従業員が壊したため使い物になりません。そのため転送装置壊した従業員は知り合いのカラクリ技師と共に転送装置を修理しているのである。

「ふぁあ～…ひまだな…新八と神楽と定春はお妙の買い物手伝っていねーし…シロは源外のジーさんのところに行ってるし…フェイトと話そうにも無線機にうどんの汁こぼして今、修理中だし…」

銀時はでかいあくびをしたあと、ひまだと呟く。
ちなみに新八と神楽はここの従業員で、定春は万事屋のペット、お妙は新八の姉、シロは転送装置を壊した従業員、源外は知り合いのカラクリ技師、フェイトは銀時が違う世界で知り合った魔法少女である。

「そうだ！シロの部屋からマンガでも借りるか」

銀時は立ち上がり、自分の寝室へと行く、寝室の戸を開け寝室の押し入れの戸に張ってあるドアが描かれているポスターの前に立つ、ポスターのドアノブ部分に手をおくと、ドアが開く。なぜ、こうなるのかというとこれはシロが使う亜神術である。亜神術に関してはリリカル銀魂のほうを見てください。

「さーてと、今日はこち亀でも見るか…」

銀時はシロの部屋へと入っていく、この部屋はシロの寝るのにしようする布団を含め、いろいろなマンガや本、などの娯楽がある戸棚があった。

「ん？」

銀時はテーブルの上に何かあるのに気づいた、それは白い色した携帯電話だった。

「ケータイ？あいついつの間にこんなもの買ったんだ？」

銀時はシロが買った携帯電話だと思いながら、携帯電話を掴み、自分の前まで持ってくる。

「……」

銀時はシロのケータイを見て、考えてた。

「開けてみよ」

銀時は興味本意で携帯電話を開く。

開けて見ると何もうつってない黒いディスプレイ画面が無数の文字が埋まり、ディスプレイ画面が白に変わる。すると、画面から粒子のようなものが出て、銀時の左手首にまとわりつき、銀色のデジタル腕時計へっ変わる。

「な…なんだこれ！？」

銀時は急に腕時計が現れたことに驚き、携帯電話を自分の足元に落とす。

すると…

「ん？」

銀時は足元に違和感を感じた。恐る恐る足元を見てみると白い円形の形をしたものができ、銀時はゆっくりと白い円形に沈んでいく。

「な…なにこれェェェェ！！」

銀時は叫ぶがどんどん沈んでいき、もう腰の方まで沈んでいた。

「ふんごぉおおおおお！！」

銀時は歯を食いしばり、円形のふちを掴んで脱出を試みる。

みるみる銀時の体が白い円形から出てくる。

「ふんごぉおおお…ってあれ？」

銀時は歯を食いしばる表情から間抜けな表情へと変わる。

「止まった…のか？」

銀時はふちに手を掴んだまま、白い円形を見回した。そう、沈むのが止まったのだ。

だがしばらくすると…

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！」

銀時の体は急に早く沈んでしまった。

銀時が完全に沈むと白い円形も小さくなり消えてしまった。

とある侍の銀魂　（シルバーソウル）（後書き）

質問をお願いします　ｂｙ作者

第一訓　来た場所は見知らぬ場所だった（前書き）

シロ「作者さん何でこの作品作ったの？」

作者「やってみたかったから」

シロ「……そう」

第一訓　来た場所は見知らぬ場所だった

「う…う～ん」

銀時は意識を取り戻し目を開ける、体を起こし辺りを見回した、そこはどこかの路地裏だった。

「あれー…もしかしてまた、違う世界に来ちゃったかなー…」

銀時は違う世界に来たと思いながら、ひきつった笑みを浮かべる。

「しかたね…寝るか」

銀時は開き直り普通の表情になる。寝ることを思いついた銀時は横になり再び寝る。

「がーごーがーごーＺＺＺ」

銀時はいびきをかきながら完全に眠りに入ってしまった。

「でさーそれでよ…」

「おい、あれ見ろよ！」

すると６人のいかつい顔した不良グループが話しをしながらやって来て、グループの１人が銀時を見つけ指差す。

「何だこいつ？」

「知るか」

「しかし、見慣れねぇ服着てんなこいつ」

不良グループは銀時に近づき、ある人は誰かと考え、ある人は知るかと答え、またある人は銀時の服装を珍しそうに見つめる。

グループの中で一番ガタイがいい男性が銀時のすぐそばまでやってくる。おそらくリーダーであろう。

「いつまで寝てんだ？起きろよオラァ！！」

リーダーは銀時の腹に蹴りを入れこむ。

普通の人なら、痛みで起きて悶え苦しむ蹴りである、しかし、それは普通の人ではの話し、銀時は普段コンクリートを破壊するような攻撃を受けて生活をしてる人なので、今の不良の蹴りなんて効くわけがない。正直今の蹴りの威力はダメガネの新八よりも弱かった。

「何なんだよ…せっかく気持ちよく寝てたのによぉ……」

銀時は眠りから覚めて、何事もなかったように立ち上がる。

不良のグループの中で、最も力が強い男の蹴りを無防備な腹に受けたにも関わらず、銀時は何事もなく立ち上がる。

不良グループから見れば、銀時の反応は常軌を逸しているものである。

しかし、その反応を見て男達はある一つの確信を得る。

「テメェ…もしかして能力者か？」

リーダー格の男が銀時に尋ねる。

「は？能力者？」

銀時は聞き慣れ言葉を聞き、訳がわからないような表情になる。

「とぼけてんじゃねーよ！俺の蹴りをくらってそんな涼しい顔でいられるわけねーだろ！」

リーダー格の男が銀時に向かって怒鳴る。

（能力者？もしかしてシロや魔導師と同じようなことができる奴らなのか？）

銀時は能力者と言う言葉で頭がいっぱいで男の言ってることなど聞いてなかった。しかし、ふとある言葉を思い出した。

（あれ？腹に蹴り？）

銀時は腹を見た、そこには服に蹴られて汚れたあとが残っていた。

「能力者だとわかったら、ただで帰すわけにはいかねー…って聞いてんのかテメェ！」

何やらぼーっとしている銀時にリーダー格の男は怒鳴る。

「おい、これはテメェがやったのか？」

「あ？はっ！だったら何だってんだよ！」
銀時の言葉に一瞬戸惑うが、リーダー格の男は続ける。
「俺これしか服持ってねーのに…」
銀時はそう言いながら握りこぶしを作る。
「何汚してんだテメェエエエエエエエ！！！」
バキッ！
「ぐへっ！」
ドサッ！
銀時はリーダー格の男の顔を殴りつけ、男は3メートルくらい飛び、地面に叩きつけられ気絶する。
「り…リーダーァアアアアア！？」
「よくもリーダーを…テメェらまとめてかかれ！」
「「「おお！！」」」
リーダー格の男がやられたことに叫ぶ人もいれば、リーダーのために銀時をやっつけようと残りのグループをに指揮するやつもいれば、その指揮に従うやつもいた。
しかし、相手が悪かった。

☆

「うう……」

辺りに呻き声が聞こえた。
声の主は、一人だけ立っている銀時の周りに倒れている不良グループであった。
「…テメェ……化け物かよ…」

一人の男が絞り出すような声で言う。

それもそのはず。
銀時はリーダー格の男を抜いた、不良グループと銀時つまり、５ｖｓ１という状況にも関わらず、不良グループは銀時に触れることはかなわず、あっという間に銀時に倒されたのだ。
拳一つで、しかも一撃で倒されたのだ。

人数が勝っていると油断をしていた面があったが、そんな言い訳で片づけられないほどの実力を感じるしかなかった。

「テメェ…何て能力使いやがった……」

仰向けに気絶していたリーダー格の男が顔を上げ無能力者なのにも関わらず、この世界で常軌を逸した実力を持つ銀時に疑問を持ち尋ねる。

「あ～…んじゃあ『糖分王』で」

銀時は考えたあと、適当に答えた。

（（（んな能力あるかよ～…ガクッ））））

不良グループはそう叫びたかったが、思うように声が出ずに再び意識が闇に落ちたのであった。

第一訓　来た場所は見知らぬ場所だった（後書き）

とりあえず質問プリーズ！

第二訓　お嬢様口調の人っているのかな？（前書き）

シロ「一応、今回はとあるシリーズの原作キャラがでてくるよ、誰だかわかるかな？それより、僕の出番まだかな～」

第二訓　お嬢様口調の人っているのかな？

「さ～て、これからどうするかが問題だが…」

不良グループをボコり終えた銀時は頭をかきながらこれからどうするかを考えていた。

「ちょっと、そこのあなた」

「ん？」

後ろから声が聞こえてきてので、銀時は後ろを振り返った。
そこには、夏服らしい半袖の学生服と薄い茶色のベストとミニスカートを着用し、赤い髪をツインテールにしている少女が立っていた。

「風紀委員（ジャッジメント）ですの。スキルアウトがよってたかって人を襲っていると報告を受け来てみましたが…」

少女は『風紀委員』と書かれた緑色の腕章を見せた後、少女は倒れている不良達ことスキルアウトを見ながら言い続ける。

「どうやらあなた一人でスキルアウトを片付けたらしいですわね」

そして、少女は銀時に顔を向けて言う。

「（え？スキルアウト？ジャッジメント？何だよそれ…とにかくあのガキに捕まっちまったらなんかめんどーなことになるな…とにかくここから離れるか…）あ～そうなんすよ。こいつら金よこせって

言うもんでさ、そんで俺が断ったら、急にキレて襲いかかってきたんだよ。そんで、俺が反撃をしたわけ」

銀時は勘で目の前の少女に捕まればめんどーなことが起きると予想し、適当なことを言ってごまかす。

「なるほど…ですからスキルアウト達が全員伸びてたわけなのですね」

少女は銀時の適当な言い訳を信じたのか、腕を組みながら納得する。

「そ、そうなんすよ！じゃあ、俺は用事があるからこれで…」

銀時は少女に背を向けて、走ってこの場を立ち去る。

「ちょっと、お待ちなさい！まだ話しが…って速っ！」

少女が銀時を止めようとするが、少女が止める前に銀時がすごい速さこの場から逃げる。

銀時の常人を越える速さを見て少女は驚く、こうして少女が驚いてる間に銀時の姿はもう見えなくなっていた。

「一体何だったんですの？」

一人この場にポツンと立っている少女はこう言うしかなかった。

☆

その頃、銀さん

「よーし、ここまで来たら大丈夫だろ…」

少女から逃げて来た銀時がいた。

「さーて…本当にこれからどうしよう…」

銀時はさらにこれからどうするか考える。

『とりあえず…服装変えたら？何かこの世界では目立つようだしその服』

どこからか声が聞こえてきて銀時に服装が目立つと指摘する。

「服変えるって…そんな金どこにあんだよ…って俺だれと話してんだ？」

頭をがしがしとかいて答える銀時だが、自分が誰と話しているのかという疑問を持つ。

『ここですよ。ここ、旦那さんの左手首にいます』

「は？左手首？」

声の主が左手首にいると言い、銀時は左手首にある銀色のデジタル腕時計を見る。

『どうも旦那さん』

「あ…どうも…」

腕時計があいさつをして、銀時も普通にあいさつを返す。

『あれ？しゃべるデジタル腕時計が目の前にあるのに驚かないんですか？』

「しゃべる刀とか、亜神とか、魔導師とか見てきたんだ。しゃべる腕時計ぐらいでもう驚きゃしねーよ」

デジタル腕時計の質問に銀時が答える。

「つーか、テメェは何者だ？」

銀時は目を細めながら腕時計に尋ねる。

『あ！紹介していませんでしたね。私はシロ様に作られたつけてるだけで簡単な亜神術と腕時計としつの機能が使える簡易亜神術使用補助機のウォッチです。以後お見知りおきを』

腕時計ことウォッチは銀時に自己紹介をする。

「なんでシロはテメェを作ったんだ？」

バンバンと亜神術を使ってるシロの姿を思い浮かべながら、なぜシロがウォッチを作ったかと銀時が尋ねる。

『はい、シロ様は亜神術を使うためのエネルギーは無限にありますが、亜神術を使い続けると頭が痛くなったりと体に負担がかかるのです。ですから負担を軽減するために簡単な亜神術を使う際に負担がかからないように私が作られたわけです』

「なるほど…」

ウォッチの説明に銀時は半分納得する

『あと私は試作機ですが、人間にも使えますし、服を変えることぐらいならできますよ』

「マジでか！？」

「はいマジです旦那さん」

ウォッチの言葉に銀時はマジかと尋ねウォッチもマジですと答える。

「……」

『どうしたんですか旦那さん？そんな思いつめた顔をしちゃって』

銀時が何かを考えていたので、ウォッチが声をかけてみる。

「なあ…一ついいか？」

『なんですか？』

銀時の一言にウォッチは尋ねる。

「服を変えた時にお前がとれたら、俺もしかして全裸に…」

『なりません！とれても元着ていた服装に戻るだけです！試作機だからと言ってなめないでください！つーかそれどこのＴｏＬＯＶＥるですか！』

銀時の言葉を聞いたウォッチはツッコンだ。

「わかったって！つーか、うるせーよ、長げーよ、くどいよお前のツッコミ」

『なんですと！』

銀時は理解したあと、ウォッチのツッコミを指摘する。指摘されたウォッチは声を上げる。

「ともかく、シロが助けに来るまでの間よろしく頼むわウォッチ」

『えっ？…あっはいわかりました旦那さん』

銀時が急に自分のことを頼ってくれてることに言葉を無くすも、すぐにわかりましたと答える。

「じゃあ、まずは自然にとけ込めるくらいの服に変えてくれねーか？」

『わかりました。では…トランス　スーツ』

ポンッ

銀時のリクエストに答え、ウォッチは変身系及び変装系亜神術をトランスを唱える。
銀時の体が白い煙に包まれる。煙がおさまると服が変わった銀時の姿が出てきた。

『どうですか？自然にとけ込めそうな服ですよ』

「どこが自然にとけ込める服なんだぁぁぁ！！？」

銀時は怒鳴った、なぜなら銀時の着ていたのはアリクイみたいな顔の白い毛に包まれた二足歩行の生き物の着ぐるみ…つまりトリコに出てくるＧＴロボの着ぐるみを着ていたからだ。

「俺が言ったのは周りの奴らととけ込める服装だ！確かに自然ならとけ込めるけど！ここじゃ浮くから浮きまくりだから！」

銀時はウォッチに向かってツッコミまくる。

『わかりました。では、次はドラゴンボールの悟空がいつも着ている服で…』

「話し聞いてたぁぁ！！？」

ウォッチは理解したと自分で言いながらも、真面目なのかふざけてるのか悟空の服をチョイスする。
銀時はまた、ウォッチにツッコミを入れた。

その後、いろいろウォッチと口論になり１０分後にようやく白衣とワイシャツ、だらしなくつけたネクタイ、ズボン…すなわち銀八先生の格好になったとのこと。

第二訓　お嬢様口調の人っているのかな？（後書き）

第三訓　違う世界に行っても似たようなことはあるもんだ（前書き）

シロ「さてさて今日も始まり始まり～」

第三訓　違う世界に行っても似たようなことはあるもんだ

銀時はズボンとワイシャツとだらしなくつけたネクタイ、ワイシャツの上には白衣といった服装をしながら昼間の表通りを歩いていた。

銀時は周りを見た、そこには西洋風の建物が並び、遠くには白い巨大風車やビルの群れ、青い空には電子掲示板がついた飛行船、近くにはドラム缶の形をしたゴミを拾ってるロボット。

「かなり技術が進んでんだなここ」

『たしかに、ここまで技術を進歩させたのは大したものです』

銀時とウォッチは周りの技術力を見て、感想を述べる。

「やっぱりここにも天人はいるのか…ってかお前人前で喋るなバレるだろ」

『大丈夫です。私の声は旦那さんだけに聞こえるようにしていますから』

銀時はこの世界にも天人（銀時の住んでる世界にいる宇宙人のこと）がいるのかと思ったあと、ウォッチに喋るなと警告する。

ウォッチは心配ご無用といった声色で銀時に言う。

「まあそれならいいか…おっ！あれは！」

銀時は納得した後、輝いた表情で何かを見つける。

銀時が目にしたのは本屋の表の本の棚にあった銀時の愛読書、『週

刊少年ジャンプ』だった。

『どうしたんですか？旦那さ…「ジャンプゥゥゥゥゥ！！」んんんんんん！！！？？』

ウォッチが言い切る前に銀時は本屋の前まで走り出した。ウォッチは銀時が急に走り出したためかなりへんな奇声を上げた。

「まさかここにもジャンプがあるとは、思ってもいなかったぜ」

銀時が本屋の表に置いてある棚の前まで来ると、ジャンプを手に入れようと手を伸ばそうとしたその時、銀時とは違う方向から誰かの手が伸びてきた。

そしてジャンプに伸びる、二本の手はピタッと止まった。

「「ん？」」

銀時と隣にいる少女は、互いに顔を見合わせた。

相手は茶髪で見た目は中学生で先ほど会った赤い髪の少女と同じ学生服を着ていた。だが銀時は少女の服装を見ても別にヤバいとは思わなかった。なぜなら、銀時はジャンプを読むことで頭がいっぱいだからだ。

「え？オタクジャンプ買いに？」

「アンタもジャンプ？」

銀時と少女は互いに目的が同じであることが分かった。

「まいったなー…一冊しかねぇや」

「どうする？」

一冊しかないジャンプをどうするか悩む二人。

「まあアンタには悪いけど、こういうのは普通は年下優先よね。じゃあそういうことで」

「オイオイ、ちょっと待てよ」

ジャンプを取り買うために銀時に背を向け本屋に入ろうとする少女の肩を掴み、銀時は言った。

「何よ？」

少女はしかめっ面で銀時の方を向く。

「何勝手に持ってこうとしてるんだ？コレは俺が先に見つけたジャンプだ。俺が貰ってく」

そして銀時もジャンプを少女にとられぬように強く掴んだ。

「は？何を言ってんのよアンタ。このジャンプは私が先にこの本屋で見つけた物よ。分かったらその手を離してくれないかしら？」

「テッメ……」

銀時は少女の言葉に青筋を浮かべた。銀時はひきつった笑みを浮か

べながら、ジャンプを掴んでる手に更に力を込め自分の元へと引き寄せる。

「馬鹿言ってんじゃねーぞ。俺なんか、この店を見つけた瞬間にジャンプの存在を感じ取ったんだよ。俺の方が早い！」

「何言ってんのよ。私はジャンプがあるこの地区に来た瞬間から知っていたわよ！」

「俺なんか、アレだよ？この世に生まれた瞬間から、この店の事知ってたよ？」

アホな言い合いを続けていく内に両者の中でイライラが募っていく。どちらも一歩も引き下がらないので、時間だけが過ぎていった。先にキレたのは銀時だった。

「いい加減にしろよクソガキ！お前みたいなガキにはジャンプなんて早えーんだよ！コ〇コ〇の〇ラえもんでも読んでいろや！」

「ガキっていうな！！私は中学生よ！！それよりその手を離しなさい！」

「お前がその手を離せ！そうすれば全てが丸くおさまるんだよ…ってあれ？これジャンプＮＥＸＴじゃね？」

「えっ！？　あ！本当にジャンプＮＥＸＴだわ…」

銀時と少女はジャンプを取り合い睨み合ってると、銀時が取り合っ

てるのがジャンプＮＥＸＴであることに気づく、少女は銀時の言葉に驚き、銀時からジャンプを奪い表紙を確かめるとそこにはジャンプＮＥＸＴと書いてあった。

「いや～最後のジャンプが買えて、本当によかったわ」

「「え？」」

銀時と少女は最後のジャンプを買ったという言葉を　聞き呆然とした表情で本屋の入り口を見た、そこにはジャンプを持ってる男子学生の姿があった。

「帰って読も」

そう言うと男子学生は呆然と突っ立っている銀時と少女の横を横切り帰っていった。

「あんたのせいで…」

「へ！？」

ジャンプＮＥＸＴを棚に戻したような音がした後、少女の怒りに満ちた声が銀時の前から聞こえてきたので銀時は前を見た、そこには顔を俯かせ拳を握りしめた怒りでプルプルと体を奮わせてる少女の姿があった。

「ま…まてガキ！ひとまず落ち着け！ここは冷静になれ！」

「誰がガキですって…？」
バチバチィッ
銀時は宥めようとしたつもりがさらに少女の怒りのボルテージをあげてしまい、体中を青白い光が纏い、前髪から電気を放ち初めている。これはまさしくぶちキレてるという証拠である。
（えぇぇぇぇ！？何、何なの！？こいつ体中から電気出てバチバチいってるんですけどォォォ！！）
銀時は驚いた表情をしながら心の中でそう思う。そして危機を感じたのか顔から一筋の汗を流し、後ろへと数歩後退りをする。
「だいたい私には…御坂美琴っていう名前があんのよっ！！！！」
少女の前髪から電撃がまるで槍のように銀時に向かって放たれた。
目標に向かっていく電撃の速さに成すすべがなく、電撃に当たり銀時は倒れる…はずだった。
「…え！そんな！」

御坂美琴と名乗る少女は驚いていた、なぜなら自分が見ている光景があまりにも信じられないものだからである。

「バッキャッロォォォ！！危ねーじゃねーか！！」

「私の電撃を避けた…」

そこには、美琴の電撃をなんとか避けた銀時がいた。美琴は自分の電撃が避けられたことを信じられずにいた。

（私の狙いがはずれたわけでも、あいつが軌道をずらしたわけでもないのにあの至近距離の電撃を避けるなんてあいつ本当に人間なの！？）

美琴は自分が狙いを定めて電撃を撃ったことの確認と、コンクリートの歩道に残る電撃の後を見て軌道をずらされていないことの確認をした後、至近距離の電撃を避けた銀時を見て本当に自分と同じ人間なのかと疑問に思う。

（まさか…あいつ能力者！？）

美琴は頭の中で一つの仮説を立てたその時。

「ねぇアンタ…」

美琴は銀時に声をかけようとするが銀時の姿はどこにも無かった。

美琴は能力者かどうか否かを知ることができなかった。ただ、一つだけ知ることができたことは

「に…逃げられたぁぁぁぁぁぁ！！」

銀時がこの場から逃げたことである。

☆

美琴から離れて１００メートルの場所。

「ふぅ…やっと逃げ切れたぜ」

逃げてきた銀時はこの場で止まり、汗を手で拭う。

「ちょっとそこのあなた」

「あ？」

銀時の後ろから誰かが声をかけてかたので銀時は後ろを振り向く。そこには、スーツ姿の男性が立っていた。

「誰だあんた？」

「申し遅れました私は九十九一（つくもはじめ）と申します。実はあなたに折り入って頼みがあります」

スーツ姿の黒縁メガネの男性は自己紹介をし、頼みがあると申し出

る。

「頼みだァ？」

銀時は言う。

「ええ…頼みというのは…」

この男性の頼みが思わぬことに繋がろうとは銀時はまだ何も思わなかったであろう。

第三訓　違う世界に行っても似たようなことはあるもんだ（後書き）

作者「こんな終わりかたになってすいません。でもネタバレにしたくはなかったので…」

第四訓　あっち向いてホイ！（前書き）

ウォッチ『とりあえず始まります』

第四訓　あっち向いてホイ！

ここは常磐台中学、学園都市でも5本指に入る有名私立中学校である。

そして、ここ2年生の教室では担当の先生がくるまで生徒たちは楽しくおしゃべりしたり、本を読んでたり、椅子に座って待っていました。

（昨日はさんざんな目に合っちゃったなー…）

そう思いながら頬杖をついてるのは、昨日本屋の前で銀時とジャンプの取り合いをしていた少女『御坂美琴』である。

「（結局あいつのせいでジャンプ読むだけのに遠くのコンビニに行くはめになっちゃったじゃない…）ハァ…」

美琴は銀時の顔を思い浮かべながら、ため息をつく。

ガラガラ

「はーい…じゃあ席についてー」

教室の扉が開き、今回の授業を担当する教師が入ってくる。

（あれ？声が違う？新しい教師…えっ！？）

美琴がいつもの授業を担当している教師と声が違うことに気づき顔を上げ教卓を見てみる。しかし、教師の顔を見て美琴は唖然とする。

なぜなら…

「どーも…何やかんやでこのクラスの授業を受け持つことなった坂田銀八で～す」

教卓にいるのが昨日ジャンプの取り合いをした男　『坂田銀時』だったからである。ただ一つだけ銀時と違うところはメガネをつけているというところである。

（な…何であいつがいんのよ！…しかもなんやかんやって何！？）

美琴は心の中で叫びながらツッコむ。

「他の教師がどんな教え方をしてるかは知りませんが…まあ俺は俺のやり方でやるんで」

銀時は気だるい声とやる気が無い態度で生徒たちに自分の教えかたを説明する。

「ねえ…ホントにあれ教師？」

「さあ…悪い人じゃなさそうだけど…やる気が全然ないよね」

「でも何か厳しそうじゃない…？」

美琴を除く生徒たちは銀時を見てヒソヒソと銀時のやる気がない態度を見て、そのことについて話し合う。

「はーい…じゃあいきなりですが授業に入ります」

銀時はそう言いながらカバンから教材を出す。

（こんな奴に授業が出来るのかしら…前から思ってたけど何なのよあの木刀…）

美琴は銀時を見て、授業ができるのかと疑問に思う。そして次に美琴は銀時の腰にさしてある木刀を見て気になり始める。

「じゃあ『ナ〇ニ〇国物語　第一章　ラ〇オ〇と〇女』を開いてー」

銀時はナ〇ニ〇国物語　第一章　ラ〇オ〇と〇女の小説をカバンから取りだし、生徒たちに開くように促す。

「は……？」

美琴は銀時の行動に目が点になるほど呆然とする。

「はい、ここ四兄妹の次男が魔女に他の兄妹の場所を教えるシーンですが…お前兄妹売ってんじゃねーよデブ、とか思った奴、思いたいのはやまやまだろうがそんなこと言うのは止めましょう」

銀時は訳がわからないことを言い続ける。

「……」

美琴もどういう言葉を返せば良いのか見つからなくただ黙って銀時を見ていた。

「はい…じゃー次男と魔女はどういう経緯で会ったのか５０字以内で答えて下さい」

銀時は授業内容を言い、生徒に答えて下さいと言う。

（こ…国語の授業…？……ていうかそんな小説今持ってないわよ！）

美琴はこれが国語の授業であることを察した後、美琴そんな小説は持ってないと心の中で叫ぶ。

「はいじゃあそこのお前、代表で答えてー」

「げっ…え、えーっと……すいませーん、実は教材忘れてしまって…」

「じゃー廊下に立ってなさい」

美琴の言い訳を言ったすぐ後に銀時は美琴に廊下に立つように言う。

「なっ…ろ、廊下って……」美琴は廊下に立つことが納得いかなかった。

「１０分間立ってたら中に入ってきていいからな」

（あ、あいつ…後で覚えてなさいよ…！）

銀時の無茶苦茶な授業や廊下に立ってろと言われたことにより美琴は怒りで拳を握りしめながら銀時に復讐を誓うのであった。

☆

放課後

「あーもう！イライラするわね！」

イライラしている美琴は両手で頭をガシガシとかいていた。

「わ…私のお姉様を廊下に立たせるなど…その教師…この黒子が必ずや縛り首に…」

美琴を廊下に立たせた銀時を縛り首宣言した赤い髪をツインテールにして束ねた彼女の名前は白井黒子（しらいくろこ）。美琴と同じ常磐台中学の生徒で美琴のことを『お姉さま』と呼び慕っている後輩でありルームメイトである。

ちなみに風紀委員（ジャッジメント）であり、１７７支部に所属している。

「そこまではしなくてもいいけどさ…あんなの教師として有り得ないってことよ！」

黒子の縛り首宣言をやり過ぎとツッコむ美琴だがやっぱり銀時の行動はあり得ないと言い怒る。

「いやー、でもその人ってなかなか凄いんじゃありませんか？」

美琴とは違い銀時のことを凄いと評価する黒いロングヘアーに白梅の花を模した髪飾りをつけてる彼女の名前は佐天涙子（さてんるいこ）。

美琴や黒子とは違い柵川中学の生徒である。

美琴「へ？」

「だって…レベル5第三位の御坂さんに向かって『廊下に立ってろ』ですよ？」

佐天涙子は廊下に立ってろと言わせたことを指摘する。

「たしかに…普通の人じゃそんなこと言えませんよね…」

佐天の言うことに納得している、黒いショートヘアーと頭の上に花の造花が大量にあるカチューシャをつけている彼女の名前は初春飾利（ういはるかざり）である。佐天涙子と同じ柵川中学の生徒で、佐天とは級友でもある。

ちなみに黒子と同じ177支部に所属するジャッジメントであり運動能力はないが情報処理能力には長けている。

「人事だと思って…とにかく、私はあいつを教師だなんて絶対認めないわ！」

美琴は歯を噛み締め、拳を握りしめ、銀時のことを教師として認めないと宣言する。

「ねえ御坂さん、それってどんな感じの人なんですか？」

佐天は銀時がどのような感じの人物なのか気になり、美琴に尋ねてみる。

「え？そうね…白髪頭の天然パーマで死んだ魚みたいな目で何故か木刀持ってて…要はやる気のなさそうなダメな大人よ…あ～もう！

！思い出すだけで腹が立ってくるわ！！」

佐天が尋ねてきたことにより美琴は普通の表情に戻り、顎に手を当てながら銀時の特徴を思い出す。

特徴を言い、更にはダメな大人と評価したあと銀時を思い出した美琴は再び怒りだす。

「あの人みたいな感じですか？」

佐天は前から来る人物を指さした。

「あーそうそう、ちょうどあんな感じの……」

美琴は前から来る人物を見たあと、表情が険しくなった。

「さてと…さっさとあいつが用意してくれたマンションを探さねーと……」

そこにはマンションを探している銀時の姿があった。銀時はしばらく歩き美琴たちとすれ違った。

「あら、昨日の殿方ではありませんか」

黒子は銀時が昨日会った人物であることを知る。

「……ごめん、ちょっと行ってくる」

「え？ちょっと御坂さん…」

美琴は黒子たちにそう言ったあと佐天の制止を聞かずに早歩きで銀

時の方へ行く。

「ちょっと待ちなさい！」

美琴は銀時の近くへとたどり着き呼び掛ける。

「ん…何だ、さっきのガキじゃねーか」

銀時は振り返り、美琴を確認する。

「ガキじゃないわよ！…それに昨日と今日はよくもやってくれたわね！！」

「…廊下に立たせたくらいでキレるとか最近のガキはカルシウム足りてねーな」

銀時は美琴のキレ具合を見てカルシウムが足りないと判断する。

「だから…あたしはガキじゃないって言ってるでしょ！」

美琴はさらにガキ呼ばわりされたことに怒る。

「はいはい分かったから…イチゴ牛乳でも飲んで良い子して寝とけ、な？」

だが銀時は美琴の子供扱いを止めずに、終いには美琴は銀時にイチゴ牛乳飲んで寝とけと言われてしまう。ブチッ

「……完っ全に頭に来たわ、あんた…あたしと勝負しなさい！」

銀時の言動にキレ、怒りが頂点に達した美琴は銀時に向かって人差し指を突き付ける。

「はぁ…？」

銀時は訳がわからずに首を傾げる。

「勝負だァ？アホ抜かせ、んなメンドくせーことやってらんねーよ…そんじゃ」

銀時はそんなメンドくさそうなことに付き合うはずもなく、美琴に背を向けようとする。

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ！」

美琴は完全に背が向く前に銀時を止めようとする。

「俺ァお前と違って忙しいの…第一そんなことしたって何の意味もねーだろうが」

銀時は勝負しても何も意味がないということを美琴に言う。

「アンタがあたしを子供だって舐めて馬鹿にするからでしょ！」

美琴は自分を馬鹿にしたことを理由にする。

「別に舐めてねーよ、お前を舐めるくらいならレロレロキャンディー舐めるわ」

銀時は美琴のことを舐めていないといい、さらには舐めるぐらいならレロレロキャンディーを舐めると言う。

「なっ…！？」

銀時はレロレロキャンディーと比べられたことに驚く。

「それに…ガキにガキって言って何がワリーってんだ？」

銀時は美琴にガキにガキって言って何が悪いと指摘する。

「だからあたしは……」

「自分のことがガキって認められねーウチはまだガキなんだよ。自分がガキだって理解して初めて子供は大人への階段登るもんなの。大人になりてーならてめーがガキだって早く気付くんだな、よく覚えとけよガキ」

美琴は言い返そうとするが、銀時が美琴にガキと大人に関する説教をする。

「……」

銀時の説教には説得力があり、美琴は返す言葉が見つからなかった。

☆

黒子たちは遠くで銀時と美琴の言い合いを眺めていた。

「何やら言い合いをしてますわね…」

黒子は銀時と美琴が言い合ってる姿を見て言う。

「御坂さん…結構言われちゃってますね」

初春も作り笑いを浮かべながら言う。

（あれ…でも気のせいかな、結構まともな言ってるんじゃ……？）

佐天は首を傾げながら銀時がまともなことを言っているのではないかと思う。

「ふ…ふっざけんなぁ！」

バチバチ

美琴は怒りが爆発し体中から青白い電気がバチバチという音を鳴らしながら出てくる。

「え…バチバチって……え、電気？…って！お前昨日のビリビリ娘か！？」

銀時は美琴が昨日、自分に電気を当てようとした人物であることに気づく。

ちなみに銀時はいやなことはすぐに忘れるタイプの人間で人の名前を忘れる上、名前を間違えてその人を怒らせてしまうことがある。

「あんた…もう嫌でも勝負してもらうわよ！」

だが、美琴は銀時との勝負のことで頭がいっぱいであった。

バチバチ

（オイィィィ！！ちょっと待てよ！また怒らせちまったよ！）

銀時はまた美琴を怒らせてしまったことを心の中で思う。

（やべーよこれ地雷だったよ、いつものノリで調子のりすぎたよ、しかもあいつ昨日、俺に電気浴びせようとしたやつだし…どうすんだ俺ェェェ！！？）

銀時は青ざめた顔で美琴を怒らせてしまったことに後悔する。

「……」

「…何も言わないってことは勝負を受けたってことでいいのかしら？」

考えている銀時だが、美琴から見ればただ黙っているようにしか見えなかった。美琴は黙っている銀時に勝負を受けたと解釈していいのかと尋ねる

（何とかコイツの怒りの火を鎮火させねーと…何かないか？）

銀時は美琴の怒りを鎮めようといろいろと考える。

「待て、一旦落ち着こう？うん、一回止めよう？」

銀時は美琴に落ち着くように促す。

「何よ今更…」

美琴は銀時の申し出に眉をひそめる。

「いや…お嬢さんがピカチュウみたいでかわいいなーなんて……」

銀時は左手で頭の後ろをかき、作り笑いを浮かべながら言う。

「……」

美琴は頭を俯かせながら黙る。

「……あれ？」

銀時は作り笑いを保ったまま美琴を確かめる。

「……また、あたしをガキだって馬鹿にしてんのかあんたはァァ！」

美琴はさらに怒りのボルテージを上げた。

（逆効果だったァァァ！鎮火するどころか火にガソリンぶっかけちまったァァァ！）

銀時は心の中で逆効果であったことをツッコむ。

（もうやるしかねーのか…めんどくせーことになっちまったな…）

銀時はもうやるしかないと思う。

「安心しなさい…レールガンは使わないであげるわ、死にたくはないだろうし」

美琴は『レールガン』は使わないと言い出す。

（レールガンって何？もしかしてとっておきってやつか？とすればあの電撃よりも強力ってことか…やべーよ！これ真正面からやり合ったら絶対死ぬよ？）

銀時はレールガンが美琴のとっておきであることを思う。

（何か手は……あ）

銀時は何かを思いつく。

「わーったよ、勝負すりゃいいんだろ？」

銀時は勝負の申し出を言う。

「ようやくその気になったわね…！」

美琴は腕を組みながら待ってましたと笑む。

「勝負はあっち向いてホイな」

銀時は勝負をあっち向いてホイと提案する。

「アンタ…どんだけあたしをおちょくってるの？」

美琴は目を細めながら銀時を睨み付ける。

「あれ？なに逃げんの？粋がってたくせにあっち向いてホイが怖いんだ？」

銀時はにくったらしい笑みを浮かべながら美琴を挑発する。

「あんなのただの運試しじゃない！」

「テメーはあっち向いてホイの奥深さがわかってねーな…まあいいよ、別に逃げても」

「……」

美琴はあっち向いてホイをやることに否定するが、銀時はあっち向いてホイの奥深さがわからないと言った後、美琴に逃げてもいいと言う。

美琴はしばし、顎に手を当て考える。

（旦那さん…さすがにこれは無理かと……）

ウォッチが心の中で諦めかける。

「いいわよ…そこまで言うならやってやろうじゃない！」

（食い付いたァァ！？あの子、予想外に乗ってきちゃったんだけどオオオオオオ！！）

「な、なんかあっち向いてホイで勝負するみたいですね……」

遠くで見ていた佐天は銀時と美琴があっち向いてホイで勝負することを知る。

（お姉様…だんだんあの殿方のペースに巻き込まれてますの…）

同じく遠くで見ていた黒子は慕ってる美琴が銀時のペースに巻き込まれてる姿を見て少し呆れた表情になる。

「じゃーやっぞ、じゃーんけーん」

銀時がジャンケンを始めようとする。

「「ポン！」」

銀時はパー　美琴はグーを出す。

「よっしゃァァ！」

勝った銀時はガッツポーズをする。

「ぐっ…でもこれを凌げば良いんでしょ！」

ジャンケンに負けた美琴は悔しそうな顔をするが、あっち向いてホイを凌げばよいと勝ち気になり銀時に挑む。

「いくぜ…あっち向いて……」

銀時が言うと銀時と美琴のまわりに緊張が走る。

「……ゴクッ」

美琴は銀時の顔を見ながら固唾を呑む。

「……」

銀時も珍しく真剣な表情で美琴の顔を見る。

ゴゴゴゴゴゴ！！

（何…この緊張感……これが真のあっち向いてホイなの…？）

美琴は緊張感を感じこれが真のあっち向いてホイと思い、額から汗が一筋流れる。

（はたから見たら実にシュールな光景ですわね……）

黒子は心の中で銀時と美琴のあっち向いてホイというシュールな光景をツッコむ。

「よお…お前レールガンってのが使えるって言ったな？」

銀時が美琴に話しかける。

（話しかけてきた？あたしの注意を逸らすつもり…？）

美琴は銀時が自分の注意を逸らすために話しかけてきたのだと心の中で思う。

「…それがどうしたの？」

美琴が尋ねる

「そりゃ奇遇だな、ちょうど俺も大砲持ってんだよ」

銀時が不敵な笑みを浮かべながら言う。

「え……？」

美琴は銀時の発言に驚く。

「男ってのは誰でも股間にバズーカ搭載してんだよ…そいつを今見せて…」

銀時は下ネタ発言をした後、ズボンのチャックに手をかける。

「なっ……ななな何しようとしてんのよアンタは！」

銀時の行動を見た美琴は顔を真っ赤にして、銀時を見ないように右を向く。

「ホイ」

銀時は指を右側にさす。

「……あ」

美琴はしまったと言いたそうな顔をする。

「はい、じゃあ俺の勝ちな」

銀時は自分の勝ちと宣言する。

「ちょ、ちょっと待ちなさい！こんなの卑怯よ！」

美琴は銀時がやったことに抗議する。

「なーに言ってんだ、お前が勝手にそっぽ向いたんだろうが」

銀時は反論を言う。

「あんなことされたら誰だって顔背けるに決まってるじゃない！」

銀時がやったことを思いだし顔を赤くさせながら美琴は言う。

「あんなこと？ホワッツ？俺ァ社会の窓が開いてないか確認しただけなんだけど？」銀時は肩をすくめながらごまかす。

「納得行くわけないでしょそんなの！一歩間違えればセクハラよ！？」

銀時のやったことに美琴は納得がいかず、さらにはセクハラだと訴える。

「わーったよ…パフェでも奢ってやるからそれで良いだろ」

美琴がうるさく感じた銀時は静かにするためにパフェを奢ってやると言う。

「パフェって…そ、そんなのに釣られるとでも…」

「いやーどうもご馳走になります！ねっ、初春？」

美琴が納得がいかずに言おうとすると佐天たちが美琴の後ろから現れる。

「は、はあ…そうですね……」

佐天の言葉に初春は戸惑いながらもそうですねと答える

「え…いや誰なの君たち？てか」

銀時は突然現れた佐天たちが誰なのかわからず尋ねる。

「御坂さんの友達の佐天涙子です！」

佐天は元気よく自己紹介をする。

初春「う、初春飾利です…」

初春は緊張しながらも銀時に自己紹介をする。

「ジャッジメントの白井黒子ですの、以後お見知りおきを」

黒子は礼儀よく銀時に自己紹介をする。

（あ…あん時のですの娘）

銀時は黒子があの時にあった少女であることを知る。

「ちょ…佐天さん……」

「奢ってくれるって言うんだし良いじゃないですか、白井さんもそう思うでしょ！」

美琴は佐天に何かを言おうとするが、別にいいじゃんと答え、黒子にも尋ねてみる。

「はぁ…まあ……」

黒子ははっきりとしない言葉ど答える。

「いやあの…正直お前ら全員奢る金なんかないんだけど？」

「じゃー早速行きましょうか！」

銀時は全員分のパフェを奢る金がないと言うが、佐天は美琴と銀時を引っ張りながらファミレスへと向かう。黒子と初春も佐天たちに続くようについてくる。

「ねえ、金がないって言ってるんだけど？首くくらせる気？何これ新手のいじめ？」

銀時はツッコむもそのツッコミも虚しく、誰の耳にも入らなかった。

『初日から大変ですね旦那さんも』

銀時がパフェを四人分奢られることになってしまいウォッチは慰めの言葉をかけた。

第四訓　あっち向いてホイ！（後書き）

シロ「質問まだかな～？」

第五訓　電気を大切に（前書き）

シロ「3…2…1…スタート！」

第五訓　電気を大切に

同日、広場のベンチ

「あーおいしかったぁ！ご馳走様！」

初春と共にベンチに座ってる佐天は喜んだ表情でお腹をさすりながら言う。

「こちとら財布がすっからかんだよ…テメーら遠慮なく食いやがって」

佐天と初春が座っているベンチの前に仁王立ちしている銀時はたらふくパフェを食った佐天たちを睨む。

「まあまあ銀さん、そう怒らないで」

佐天は銀時の怒りを鎮めるために宥める。

「銀さん？」

同じく銀時の隣に立っている佐天が銀時のことを銀さんと呼んだことに首を傾げる。

「名前が銀時だから銀さん！銀時先生って何だか呼びにくいし」

佐天が銀時のことを銀さんと呼ぶ理由を説明する。

「そ、そう……まあ別にいいけどさ」

美琴は納得したあと、別にいいと答える。

ドッカーン！！

シャッターがしまっている銀行のシャッターが爆発してあたりに爆音が響く。

「「！！」」

美琴と黒子は爆発に気づき銀行の方を見る。

「な…何！？」

佐天は耳を塞ぎながら何かと叫ぶ。

「……治安ワリーなこの街」

爆音などに慣れてる銀時は気にせずにが治安の悪い街だと答える。

「初春！アンチスキルに連絡を！急いでくださいな！」

黒子は初春にアンチスキル即ち学園都市の警備員に連絡をとるように初春に言いながらポケットからジャッジメントの腕章を出し、腕章を袖につけ、柵を飛び越え銀行の方へと向かう。

「は、はい！」

初春は黒子の言うことに従い、アンチスキルに連絡する。

「黒子！」

美琴は向かっていく黒子の名前を叫ぶ。

「お姉様…これはジャッジメントのお仕事ですの」

黒子は美琴が来ないようにジャッジメントの仕事だという。

「分かってるわよ…！」

美琴は大きな声で答える。

「…では」

そう言いながら現場へと向かう。

「……オイ、一人で行かせていいのか？あのツインテール」

銀時は隣にいる美琴に尋ねる。

「黒子はジャッジメントだから…こういうのは慣れっこよ」

美琴は問題無しといった表情で答える。

「急げ…もたもたするな！」

爆煙の中から厳つい顔の三人の強盗グループが出てくる。そして、現場から逃げだす。

「お待ちなさいな…ジャッジメントですの！器物破損、強盗の現行犯で拘束します」

犯人グループの前から黒子が現れ、強盗グループの逃げ道を妨害する。

「「「「……」」」」

「「「「プッ…ブワハハハ！！！」」」」

強盗グループは自分たちを拘束するといった黒子を笑う。
黒子は急に笑った強盗グループに驚くもすぐにジト目で犯人グループを見る。

「オイお嬢ちゃん！そこどけよ、怪我したくなかったらなぁ！」

強盗グループの1人が黒子に近づき殴りかかる。

「はあ…そういう三下のセリフは…」

黒子はうまくかわし合気術で相手の力を利用し殴りかかった腕を掴み投げ技の要領で相手を投げ背中から地面に叩きつける。

ブンッ

「ぐあっ！？」

叩きつけられた強盗は声を出したあと力尽きて気絶する。

「死亡フラグというのをご存知ありませんの？」

（実践型の合気道…あのツインテールやるじゃねーかオイ）

銀時は心の中で黒子の合気道を感嘆する。

「ダメです！今この広場から出ちゃ！」

「でも！私の子供が……」

銀時の近くで、初春が女性を止めていた。

「ん？」

「どうしたの？」

銀時が初春と女性の行動に気づき、美琴がどうしたのか尋ねる。

「子供がいないんです！車の中に忘れ物をしたと…！」

母親の視線の先にはドアが開きっぱなしの車があった。

「そんな…！」

「…みんなで手分けして探しましょう！」

初春はこうなった状況に驚き、美琴は皆で手分けして探そうと提案する。

☆

「さて…まだ抵抗しますの？」
黒子は残った強盗グループを挑発する。
「くそがっ！」
強盗は黒子の挑発に乗り、怒りに任せ殴りかかろうとする。
「まだ分かりませんのね…」
ヒュン！
黒子はため息をついたあと、黒子の姿が消えた。
「！？」
（しゅ、しゅしゅ瞬間移動した！？何アイツ！ヤードラット星人！？）
驚愕の表情で銀時は心の中で黒子が某メガヒットマンガに出てくる宇宙人だと思いながら驚いていた。
「ちょっとあんた…黒子の能力に感心してないで早く探しなさいよ」
車の中で子供を探している美琴は銀時に注意をする。

「うーん…そんな遠くには行ってないと思うんだけど…あれ？あそこに誰か……」

佐天はしゃがみ込み、柵の下に生えてる垣根の調べて子供がいないかと確かめていた。ふと、顔を上げ前を見ると誰かがいるのを見つけた。

「何だお前…ちょうどいい、一緒に来い！」

「お兄ちゃん誰なの？」

「いいから来いって！」

佐天が見たのものは男の子を見つけ、その男の子を連れ去ろうとする強盗の姿だった。

「！？あの…」

銀時と美琴に助けを求めようと二人を呼ぼうと後ろを向くが、呼んだら間に合わないと判断した佐天は強盗と子供の方を向く。

（私だって…私が助けなきゃ！）

佐天は表情を険しくさせな助けなきゃと決心する。

「いないわね…一体どこにいるのかしら」

車の中を探し終えた美琴は車から出てくる。
「広場の中にいるんじゃねーの？かくれんぼしてんだよ多分」
銀時は広場の方を向きながら呟く。
「何でお母さん相手にかくれんぼするのよ！少しは真面目に……」
美琴は銀時にツッコミ、叱ろうとする。
「何だお前！」
叱ろうとした美琴の声を遮ったのは強盗の声だった。
「え？」
「何だ？」
銀時と美琴は声のした方を見る。
「ダメ！この子に手を出さないで！」
そこには、子供を強盗から必死になって取り返そうとしている佐天の姿があった。
「！」
（しまった…まだ仲間が…！）
黒子は驚いた表情をしながら心の中で強盗グループがまだいたことに気づく。

「チッ、このガキはもういい……どけっ！」

ガッ

「うあっ…！」

強盗は佐天のことを蹴飛ばし、佐天は抱いている子供と一緒に後ろに飛ぶ。

「「！」」

蹴飛ばされた佐天を見た美琴は表情を険しくさせ、銀時は眉を上げる。

「くっ…」

黒子も自分の友人が蹴られたことに腹を立て、歯を噛みしめる。

「黒子！…こっからは私の個人的な喧嘩だから」

「お…お姉さま……？」

黒子は急に前に出てきた美琴に驚く。

「手ェ出すんじゃねーぞ…！」

同じく銀時も木刀を抜きながら黒子の前に出てきて美琴の言葉に繋

がるようなセリフを言う。

「あんたも引っ込んでなさい」

「いやここは俺の見せ場だから、お前が引っ込んでろよ」

「いや私のほうが見せ場だから」

「いや俺の見せ場のほうが駅から近い」

「いーや私の見せ場のほうが駅から近いし、しかも速い」

「いーや俺の見せ場のほうが駅から近いし、お前のより速い、しかも運賃が安い」

「……」

黒子は銀時と美琴のアホな言い合いをジト目で見ていた。

「くそっ…このまま引き下がれるかよ！車でテメエらまとめて…」

強盗はあらかじめ用意していた車に乗り込みエンジンをかけ、美琴と銀時に突っ込もうとする。

「ちょうどいいわ…見てなさい、これが…超電磁砲（レールガン）よ！」

美琴はポケットからゲームセンター用のコインを取り出す。

「あっ！テメッ！俺の見せ場潰しやがって…」

銀時は美琴が自分の見せ場をとったことに怒る。

「いいじゃない…こんなに近くで私のレールガンを見られるんだから」

美琴は銀時を宥める。

（こういうのに限って実物は大したモンじゃ…いやでもフェイトやなのはも砲撃とか出してたよな…いやでもあいつらにはデバイスってものがあるから出せたわけだし…デバイスがないあいつに…）

銀時は心の中で思っていると、美琴が親指でコインを上に飛ばし、落ちてコインを親指で弾くとコインがオレンジ色のビームへと変わり、ビームはコンクリートでできた道路を抉りながらまっすぐ強盗の車へと向かっていった。

キィーン…バシュ！

「なっ…」

銀時はレールガンに驚く。

ズガーン！！

レールガンは車に着弾し、車は縦回転しながら吹っ飛び、銀時と美琴の上を通りすぎた。

「……」

銀時はレールガンの威力を見て声が出ないほど驚いていた。

「どう…私のレールガンは？」

美琴は得意げな顔で自分のレールガンはどうだったかと尋ねる。

「……ま、まあまあだな、うん」

（今のレールガンの威力は確かにスゲーな、こりゃあなのはとフェイトといい勝負だな…）

銀時は答えた後、なのはとフェイトの砲撃を思い浮かべる。

「もしかしてビビった？」

美琴はニヤニヤと笑いながら銀時に尋ねる。

「ビビった？え、意味が分からないんだけど？何かビビることなんてあった？つーかそのニヤニヤ止めろ！」

銀時は美琴の質問を否定し、見苦しい言い訳をする。

「恐かったんだ？」

美琴はニヤニヤ笑いながら再び尋ねる。

「恐い？何それ？恐いって感情が俺にはよく分からないんだけど？つーか似たようなもん何回も見てるし俺」

銀時はまた見苦しい言い訳をする。

「またあの二人は…本当に凸凹コンビですの」

（それにしても今回の強盗の能力…何か不自然に強力だったような…）

二人の後ろにいた黒子は呆れた表情で、呟く。

その後、戦っていた強盗の能力が不自然に高かったことを感じた黒子は顎に手を当て考える。

「ありがとうございました…本当にありがとうございました！」

子供の母親は何度も頭を下げお礼を言う。

「お姉ちゃん、ありがとう！」

子供も頭を下げお礼を言う。

「そんな…いいって…！」

佐天は両手を振り照れながら言う。

「頑張ったわね、佐天さん！」

美琴は佐天に近づき、声をかける。

「御坂さん…」

佐天は美琴の方を向く。

「お疲れ様、かっこよかったよ！」

美琴は佐天に労いの言葉をかける。

「……」

しかし、佐天は黙っていた。

「…佐天さん？」

美琴は黙ってる佐天を見て、美琴は首を傾げる。

「……ご、ごめんなさい…今日はちょっと先に帰ります」

「え？う、うん…」

佐天の言葉に美琴は一瞬戸惑うも、すぐに承諾する。そして、佐天はこの場を去った。

「佐天さん？」

「……」

初春は去っていく佐天を見ながら佐天の行動に首を傾げ、銀時は去っていく佐天を黙って見ていた。

第五訓　電気を大切に（後書き）

作者「時系列が違うってツッコまないでね」

第六訓　思わぬことは急に起きるものである（前書き）

とりあえず始まります

第六訓　思わぬことは急に起きるものである

☆

同日、公園にて。

「……」

広場から離れた佐天は公園のベンチに座っていた。
しかし、佐天はなぜか元気がない表情をしていた。

「よう」

「銀さん…」

佐天は声のした右の方を見る、そこには美琴と一緒に広場にいる筈の銀時が立っていた。佐天は銀時の姿を確認すると小さく銀時の名を呟く。

「ワリーな、一人で考え事してる時に」

銀時が頭をかきながら言う。

「ううん…いいんです、本当に何でもないことですから」

佐天は首を横に振りながら何でもないと答える。

「……なら、別にいいけどよ」

銀時はそう言うと、佐天と同じ方向を向き、空を見上げた。

「……スゴいですよね、御坂さん…」

「……？」

黙っていた佐天が言い出す、銀時は首を佐天の方に向ける。

「学園都市最強のレベル5…みんなから尊敬されて…努力家で……あたしなんて能力を使うことさえ出来ない…御坂さんと変わらないのは年だけ……」

佐天は言い続ける、美琴がすごいことを自分がすごくないことを。

（……この街にいる奴（人）全員がスゲー（スゴい）力を使う人間ってわけじゃねーんだな（ではないんですね））

銀時とウォッチは同時に同じことを思う。

「気にすることじゃねーよ、お前だっていつかああいうのが出来るようになんだろ？」

銀時は佐天を慰める。

（瞬間移動…魔貫光殺砲と来りゃ…気円斬辺りか？）

銀時は黒子のテレポート、美琴のレールガンをドラゴンボ〇ルに出てくるキャラの技にして例えながら思う。

「…みんなそう言ってくれます、御坂さんも白井さんも初春も……

『いつかきっと能力が現れる』…私もずっとそう信じてました、でも…最近思うんです、能力が使えるようになるのは才能ある選ばれた人間…私みたいな何の取り柄もない人間なら…きっとダメなんです」

佐天は思ってたこと全て言う。

「……」

銀時は佐天をただジッと見続けていた。

「こんな話…御坂さんや白井さんはもちろん……初春にだってしてません……だって…みんな能力が使えるから…私だけみんなと違うから……！！きっと私…心の奥では御坂さん達に嫉妬してるんです……友達なのに！」

佐天は自分だけ美琴たちと違うと言い、心の奥で美琴たちに嫉妬をしていると言う。

「……」

だが銀時は黙って見たままである。

「私…大嫌いなんです…大切な友達に嫉妬する自分のことが……本当に……最…低…ですよね……」

佐天は今の自分を最低だと感じ、膝においてある手を悔やむあまり握りしめる。そして顔を俯かせ目からは涙がこぼれた。

「……泣いてんじゃねーよ」

「え…？」

銀時の言葉に佐天は顔を上げ銀時の方を向く。

「人ってのは無敵じゃねーんだ…誰だって嫉妬もすりゃつまんねーことで恨みもする、ちょっと凄ェ友達に嫉妬するなんざ良くある話じゃねーか…」

銀時は鼻をほじりながら話しを続ける。

「でも……私はレベル０で…この街じゃ何の価値もなくて……」

佐天は自分が無能力者であることと、無能力者が学園都市では何の価値もないことを話す。

「一つ聞かせてくれや、テメェは何で超能力が欲しいんだ？」

銀時は佐天になぜ超能力が欲しいのかを説明する。

「そ、それは…やっぱり学園都市にいるなら能力が使えなきゃダメだし……」

佐天はこう答える。

「んなことねぇだろ、能力が使えねーヤツなんざかなりいるじゃねーか」

銀時はほじった鼻くそを飛ばしながら反論する。

「確かに…学園都市にもレベル０の人は大勢います…それでも…やっぱりレベル０って言うのは辛いんです！！私の周りにいるのはみんな凄い人だから…余計に自分が情けなくて……いつもは明るく振る舞ってるけど、このまま能力がずっと現れなかったら…初春が…みんなが…いつか私から離れて行っちゃうんじゃないかって……いつも…怖くて怖くてたまらないんです……！！」

佐天は前を向き顔を俯かせながら答える。
そして本心を話す、話すにつれ声が大きくなり、最後は涙を流した。

「…ワリーな、俺にはやっぱ理解できねーわ」

銀時は理解できないと答える。

「……そうですよね、やっぱり私…」

佐天は再び落ち込もうとする。

「勘違いすんな……テメーは一人で考えすぎなんだよ」

「……え？」

銀時は佐天の前まで歩き、佐天の正面に立った。
佐天は顔を上げる。

「テメーらが仲の良いダチ公ってこたァ俺にだって分かるダチ公の関係ってのは…そう簡単に切れちまうようなもんなのか？もし切れちまうってんなら……そんなもんダチ公とは言わねェ」

銀時は美琴や黒子や初春、佐天が仲良く行動する姿を思いだしなが

ら、友達の絆についてを説く。

「……」

佐天は銀時の話しを黙って聞く。

「第一…レベルで人様を値踏みしようなんざくだらねえんだよ、そんなつまんねェこといちいち気にしてたらやってらんねェよったく」

銀時はメンドくさそうと言いたげな顔で頭をかきながら答える。

「……弱いですね、私」

佐天はそんなことを言える銀時に対して、自分は弱いと言う。

「…弱くなんかねーだろ」

「えっ…？」

銀時の言葉に佐天は声を上げる。

「テメーは能力なんか目じゃねえ…人として大切なモンを持ってるじゃねーか」

「大切なもの…？」

銀時の言葉に佐天は首を傾げる。

「テメーはさっき……あのガキをしっかり守っただろ？」

銀時は男の子が強盗に連れていかれそうになったあの時、佐天が必死で強盗から男の子を守ったことを佐天に言う。

「強盗にビビらねーで立ち向かうなんざ……普通出来っこねェテメーの『勇気』ってのは胸張って誇れる…紛れもねえ『強さ』じゃねーか」

銀時は腕を組みながら佐天の勇気を強さと評価する。

「……！」

佐天の心に銀時の言葉が響く。

「そんなつえーお前を見下す奴がいたら…俺がそいつを思いきりぶん殴ってやらァ」

「銀さん……」

佐天は銀時が自分をこんなに思ってくれたことに感動する。

「そうだ…私が初春たちを信頼しなきゃ……みんなに失礼だよね…！」

佐天の悩みが吹っ切れる。そして初春たちを信頼することを誓う。

「俺から見りゃテメェら全員上等で仲が良いダチ公だよ」

銀時は自分が美琴、黒子、初春、佐天をどういう風に見えたのかを言う。

「うん…私…能力にばっかり気が行ってて他のことが見えてなかった……大切な友達…それに銀さんみたいな大人もいてくれて…凄く恵まれてるんだ」

佐天は周りが見えなかったことと、美琴たちと銀時がいることで自分が恵まれていることに気づく。

「オイオイ、お前なぁ…俺みてーなのとつき合ってたらロクなことにならねーぞ？」

銀時は頭をかきながら言う。

「アハハハハ！…やっぱり銀さんは面白いね！ねえ銀さん…一つだけいいかな？」

佐天が笑ったあと、銀時に一つ何か言おうとする。

「何だ？」

銀時は尋ねる。

「私、これから頑張ろうと思う…自分から逃げないで努力する！」

佐天はこれから頑張ろうと、自分から逃げないと銀時に宣言する。

「いいことじゃねーか」

銀時はいいことだと評価する。

「でも…頑張っても何も変わらなかったら……？自分の力でどうにもならなかったら……銀さんはどうする？」

佐天は銀時に頑張ってもどうにもならない時はどうするかを尋ねる。

「……」

銀時は黙りこんだ。そして昔のこと思いだしていた。

「銀…さん…？」

黙りこんだ銀時を心配してか佐天は銀時の名を呼ぶ。

「……昔、ちょっとした喧嘩があってな…そん時、俺ァ全力で戦った。だが結局何も護れずに…てめーの弱さに後悔することになっちまったけどよ…」

銀時は昔にしたことを佐天に話す。

「え……？」

佐天は銀時の話しにわからないことがあり首を傾げる。

「けどな…まだ負けてねェんだ、今も戦ってんだよ…俺ァ」

「……？」

銀時の言葉の意味がわからなく佐天は首を傾げる。

「人が背負って戦わなきゃならねぇモンに…負けとか終わりなんざありはしねェ本当に人が負けちまうのは…魂が折れちまったときだ」

「…魂？」

銀時の『魂』という言葉を佐天が言う。

「ダメかどうかなんて気にする事じゃねぇ…てめぇが諦めねぇ限り負けはねェんだ。石にかじり付いてでも諦めねえ人間に…簡単に限界なんざ来やしねェよ」

「……」

銀時の言葉を佐天は黙って聞く。

「それに…お前には支えてくれる仲間がいるじゃねーか一人で抱えきれなくなったらそいつらに頼りゃいい、もしそれでもダメなら…」

銀時が言い終えると右腕を動かす。

「俺も一緒にてめーの荷物背負ってやるよ」

銀時は右手の親指を立てながら、自分の背中を座す。

「……」

佐天は銀時が言ったことが嬉しくて微笑む。

「何にしても…本当に大切なモンは自分の魂で決めな、後悔しねーように…」

銀時は後悔しないように佐天に言う。

「うん…ありがと、銀さん」

佐天は銀時にお礼を言う。

「…間違っても俺みてーに後悔しか残らねえ生き方はすんじゃねェぞ」

銀時は自分と同じように後悔しか残らない生き方はするなと忠告する。その時の銀時はなぜか寂しげな表情だった。

「銀さん…？って！銀さん上！上！」

銀時の言葉に佐天は疑問に思うが、何かに気づき指を指しながら銀時に上を向くように言う。

「は？上…ってあれ？この白い光ってまさか…」

銀時は佐天の言う通り上を見てみると、そこには銀時が住んでた世界からこの世界に来た原因の白く光る円があった。

その円から誰かの足らしきものが出てきた直後、円から公園を包むくらい白い光が包む。

☆

「御坂さん！白井さん！あれ見てください！」

初春は美琴と黒子に白い光が発してる所を指差す。

「初春！アンチスキルに連絡を…」

光を見た黒子は初春にアンチスキルに連絡するように言う。

「私、行ってくる！」
美琴は光を発している場所へと走って向かう。
「あっ！ちょっとお姉さま！？」
黒子は美琴を追うようにテレポートを使い、美琴の隣まで行き、一緒に走る。

☆

「何だったの今の光！？銀さん大丈夫…えっ！？」
「ああ…大丈夫だ…は！？」
佐天は腕で光から目を守りながら言う。
銀時が無事か確かめるために佐天は目の守りを解くと驚きの光景があった。
目の守りを解いた銀時はあり得ないものを見た顔をしながら驚く。
「シロくん本当に銀さんがいるの？」
「多分ここにいると思うよ」
「あっ！銀ちゃんアル」
そこには万事屋のメンバー、新八、神楽、シロの姿があった。

第六訓　思わぬことは急に起きるものである（後書き）

質問くれー…

第七訓　これで全員そろいました（前書き）

グダグダかもしれないけどそこは暖かい目でお願いします。　by 作者

第七訓　これで全員そろいました

銀時と佐天の前に銀時が営んでる万事屋の従業員の一人で薄い青色の着物と青い袴を着た、黒髪のメガネをかけた地味で気弱そうな少年『志村新八』と同じく万事屋の従業員の一人で赤いチャイナ服を着ている、橙色の髪を両サイドにまとめぼんぼりで団子状にしている戦闘民族　夜兎族の少女『神楽』と同じく万事屋の従業員の一人で白い髪と黒い長袖シャツと茶色のズボンを着た少年は亜神と呼ばれる神『シロ』。

「銀さん！探しましたよ！」

「探すのに苦労したんだから銀ちゃん」

新八とシロは思っていることを言う。

「新八、神楽、シロ！？お前ら何でこんなところにいんだ！！」

「あー実はね…」

☆

回想

ここは万事屋にあるシロの部屋。

「シロくん、銀さんがなのはちゃんやフェイトちゃんが住んでる世界とは別の世界に行ったって本当？」

新八が真剣そうな表情で尋ねる。

「うん。この機械は僕が源外さんの転送装置を真似て作ったやつなんだけど…どこに飛ぶのかわからない上、行きは自由だけど帰りはいつ帰れるかわからない失敗作なんだよ」

シロも新八と同じように真剣な表情で答える。

「シロ、銀ちゃんはいつになったら帰って来るアルか？」

心配そうな表情した神楽はシロに尋ねる。

「わからないよ…でも一年以内には帰ることができるよ」

シロは悔しそうな表情で答える。

「シロくん！この機械（からくり）を使って銀さんの所にいこう！シロくんなら銀さんのいる世界にいけるはずだ」

「えっ！？」

新八の言葉にシロは驚く。

「大丈夫アル！シロなら銀ちゃんがどの世界にいようが必ず見つけ出せるアル！」

「確かにできるけど、でも…僕はともかく、神楽と新八はいつ帰れるかわかんないよ」

「一年以内には帰れるんでしょ」
シロはいつ帰れるかわかんないと言うが、新八は一年以内には帰れるという。
「……わかった！」
神楽と新八の言葉を聞き、決心するシロ。シロは機械のボタンを押すと、銀時が通った白い円が出てくる。
「『ファイバー』」
シロの固有の術『亜神術』を唱えるとシロの服から帯状のものが出てきて、神楽と新八の体を巻く。
「シロくんこれは？」
新八が自分の体に巻かれた帯を見て尋ねる。
「迷子になりたくないならしっかり巻きつかれてね…じゃいくよ！」
そう言うとシロは円の中へ入り、新八と神楽も続いて入った。
回想終了。
☆
「というわけなんだよ銀ちゃん」

シロが回想の説明を終える。

「というわけ…ってじゃあ俺は一年もこの世界にいんのか！？」

銀時が話しの内容を聞き、一年もこの世界にいることになるのかと尋ねる。

「いや正確には一年以内だよ銀ちゃん、なぜかと言うと帰る時期は明日かもしれないし一週間後かもしれないし一ヶ月後かもしれないから一年以内なんだよ」

シロが正確な答えを言う。

「え！？銀さん別の世界ってどういうことなんですか！？」

佐天はシロの話しの別の世界という言葉に疑問を持ち、銀時に尋ねてみる。

「実はな…」

「この天パぁぁぁあああ！！！」

「ぐほぉおおおおお！！！」

銀時が説明しようとした時、神楽の飛び蹴りが銀時の横顔に入り銀時は奇声をあげながら五メートル先へと飛んだ。

「「えええぇぇぇぇぇ！！？」」

佐天と新八は神楽の行動を見て叫ぶ。

「私たちが心配してる間、他の女とイチャついてるとはどういう神経しているアルかぁぁぁ！！」

ベキッ！ドカッ！バキッ！ベコッ！ドスッ！メキッ！

「グヘッ！ガハッ！」

神楽は銀時の胸に跨がり顔をボコスカ殴る。

「私、もう情けなくて泣けてくるヨ！オーイ、オーイ」

神楽は原型がわからなくなったほど膨れ上がった銀時の顔を殴るのを止め、そのまま目に手を当てて泣いた。

「ちょっと神楽ちゃん！やりすぎ！というかまたドラマの影響受けたの！？」

「よくわかったアルな新八、特別に及第点をくれてやるネ」

新八のツッコミに神楽はシレッとした顔で返す。

佐天は銀時たちのノリについていけずただ呆然としていた。

「神楽、ちょっとやりすぎじゃ…」

シロが神楽にやりすぎだと言おうとした時。

「そこのあんたたち！」

「「ん？」」

「何？」

叫び声が聞こえてきて新八、神楽、シロは声のした方向を向いた。向いた先には美琴と黒子が走ってこっちに向かっている姿があった。

「あっ！御坂さんに白井さん！」

佐天は美琴の声を聞き我に帰り、美琴と黒子の方を向き名前を呼ぶ。

「ここにいたのね佐天さん！」

「それより御坂さん！銀さんが謎の白い光とともに現れた謎のチャイナ娘にボコボコに殴られたんです！」

佐天はベンチから立ち上がり、美琴に詰めより必死に今の状況を説明する。

「佐天さん落ち着いて！っていうか謎のチャイナ娘って誰！？」

美琴は佐天の両肩に手を乗せながら落ちつかせるように言った後、謎のチャイナ娘が誰かと尋ねる。

「お姉さま！どうか黒子にも詰めよらせてください…」

黒子も詰めよろうとしたが美琴が黒子が気絶するほど強烈な拳骨を頭にいれたのはいうまでもなかった。

「謎のチャイナ娘？それは私のことアルかガキんちょ」
美琴は声のした方を見るとそこには仰向けになって気絶している銀時の横に立っている神楽の姿があった。
「ちょっとあんた！誰がガキんちょよ！誰が！？」
美琴は神楽にガキ呼ばわりされたことに怒る。
「そうやって自分がガキってことを否定する奴はまだガキの証拠ネ」
神楽はポケットから取り出した酢昆布をクチャクチャという音をたてながら食べる。
「あんただって…あんただって私と同じぐらいの歳のガキじゃない！！」
神楽の生意気な態度にキレた美琴の体の回りから青白い電気が出てきて、言い終えると同時に、電撃を槍のように放つ。
「おわっ！」
神楽は美琴の電気を避ける。
（あいつと同じように避けた！？）
「いきなり私にケンカふっかけてくるなんていい度胸アル！相手をしてやるから来るヨロシ！」
神楽は完璧にケンカモードに入ってしまった。

「佐天さん達なるべく遠くに離れてくれない？あと黒子運んでくれない？」

「あ…はい」

美琴の言葉に佐天は答える。そして倒れている黒子をおぶって離れる。

「何かわからないけど離れたほうが良さそうだね…新八！銀ちゃんの足を持って、僕は頭のほう持つから」

「わかった」

シロと新八は銀時を担ぎながら、佐天と一緒に美琴の後ろ姿が見えるくらいの距離まで離れる。

「ねぇ…あんた『レールガン』って知ってる？」

美琴は背を向き神楽との距離を離すために歩く、歩いてる途中でポケットからコインを取り出し、握りこぶしの親指にコインを置く。一定の距離までいくと美琴は止まり再び神楽の方を向く。

「れーるがん？何それ食えるアルか？」

「あんたはどこの地球育ちのサイヤ人よ！」

神楽のボケに美琴がツッコミを入れる。

「何やろうとしてるんだろうあの子？」

見ていたシロは美琴が何をやるのかを疑問に思っていた。

「わからないなら見せてあげるわ…これが私のレールガンよ！」

美琴はコインを上に弾き、レールガンを放つ。

ちなみに本当に当てるつもりはなくただ神楽を脅かそうとしているだけです。

キュイーン

レールガンは真っ直ぐ向か…わなかった。

「え…うそ…」

美琴のレールガンが右斜め上に弾かれたのだ…神楽の前に立っている銀時と銀時の木刀によって。

（う…うそでしょ…私のレールガンを木刀だけで弾き飛ばすなんて…）

美琴はいまだに自分のレールガンが木刀に弾き飛ばされた現実に納得がいかなかった。

「おい、美琴こっち来い…」

「え？あ…うん…」

美琴は銀時に言われた通りに銀時の近くまで来る。

「銀ちゃん！ヒドいヨ！ケンカの邪魔するなんて！あんなへなちょこビーム私でも避けれるヨ！」

「へなちょことは何よへなちょことは！！」

ドカッ！　バキッ！

「いでっ！」

「いだっ！」

神楽と美琴がいがみ合っていると銀時の拳が神楽と美琴の頭に落ちた。

「バッキャロォォォ！喧嘩ってもんはなァ！てめーら自身で土俵にあがっててめーの拳でやるもんです！特に美琴！レールガンをそんなに撃つな危ねーだろーが！」

銀時は美琴と神楽に説教をした。

☆

その後、初春とアンチスキルが来たが、シロが白い光のことを説明するからあの警備員の人達をなんとかしてといい黒子と美琴がアンチスキルを帰した。

そして、銀時達のこと、銀時が住んでた世界のこと、この世界に来

た理由などを話した。
最初は信じて貰えなかったが江戸にあるジャンプを美琴に見せた所、信じてもらえました。

「という訳なんだよ」

シロが

「という訳って…じゃああんたの世界には天人(あまんと)って呼ばれる宇宙人が江戸幕府の実権を握っている世界なのね」

美琴がシロに銀時の世界のことを尋ねる。

「そうだよ。後、神楽も夜兎族っていう天人だから」

「えっ！？神楽ちゃんって宇宙人だったんですか！！」

シロの言葉に初春は驚く。

「本当ですよー…そうだね…神楽、あの自販機を持ち上げて」

「わかったアル」

シロは自販機を指差した後神楽に自販機を持ち上げるように言う。
神楽はそれを了承し自販機の側までいく。

「ちょっと、シロくん！神楽ちゃんがあんな重いものを…」

「これでいいアルかシロ？」

初春がシロに言おうとするも、自販機を軽々と持ち上げた神楽が初春の言葉を遮る。

「えええぇぇぇ！！」

「う…うそぉぉぉぉぉ！？」

「な…なんてバカ力ですの…」

「ちょっと…うそでしょ…」

初春、佐天、黒子、美琴は神楽が自販機を持ち上げている姿を見て、驚きの声をあげる。

「神楽は夜兎族っていう宇宙最強戦闘種族の夜兎族だからあんな怪力があるんだよ」

「「「「宇宙最強！！？」」」」

シロが言った、『宇宙最強』という言葉に驚く四人。

「まあ…それはともかく…銀ちゃんは何で教師なんかしてるの？」

「あ…それ、僕も気になります」

「私もアル」

「そうよ！何であんたみたいなのが教師なのよ！」

シロは銀時が教師をやっていることに疑問を持ち尋ねてみると、それにつられて新八、神楽、美琴も尋ねてきた。

「九十九一っていう学園都市のスカウトマンがよレベル５の能力者の攻撃を避けられるあなたを是非教師として雇いたいっていうからその話に乗ったんだよ」

銀時は教師になった経緯を話す。

「銀ちゃん！学園都市って何アルか！？能力者って何アルか！？」

「俺来て１日目だからよく知らねーんだわ、だからそこにいる四人に聞いてくれ」

神楽の質問を銀時は美琴達に回す。

神楽は美琴達に近づく。

「学園都市と能力者って何アルか？」

神楽は美琴達に尋ねる。

学園都市とは総人口２３０万人で人口の８割が学生がいる科学が発展している場所であり、そこでは全学生を対象にした超能力開発実験をしており、レベル０（無能力者）からレベル５（超能力者）の能力者を生み出している。

「ということよ」

「ふーん…じゃあビリビリのレベルはいくつぐらいアルか」

「私はレベル5よ、あとビリビリいうな」

神楽と美琴の会話。

「佐天さんそれ本当ですか！」

「本当だよ初春！銀さん木刀だけで御坂さんのレールガンを弾いたんだよ！」

「ま…まさか私のお姉さまのレールガンを木刀で弾くなんて…」

初春、佐天、黒子の会話。
その後もしばらく話は続きました。
そして銀時達万事屋組は美琴達と別れ、住むことになるマンションへと向かうのであった。

第七訓　これで全員そろいました（後書き）

銀さん米堕卿のビーム弾き返せたんだからレールガンだっていけるよ…たぶん

第八訓　顔にラクガキする時にはまずおでこに肉とかけ。（前書き）

とりあえず更新します。ｂｙ作者

第八訓　顔にラクガキする時にはまずおでこに肉とかけ。

『学舎の園（まなびやのその）』。
学園都市第七学区の南西端に存在し、御坂美琴と白井黒子が通っている常盤台中学を含む５つの有名なお嬢様学校をつくる共有地帯であり、並の学校の１５倍以上の敷地面積をもち、内部は極めて小さい街となっている。
それと周りには大きな柵が張り巡らされており、部外者を寄せ付けない。
ゆえにこの学舎の園には学舎の園にある学校の生徒と教師、関係者以外は入れない。

「雨やんでよかったね」

「そうアルな」

「でも銀さんどこにいるのかな？」

「僕が知ってるから案内する」

学舎の園の中にいるシロと学園都市の雰囲気に合わせた服を着た神楽、新八は銀時を探していた。
ちなみにシロは先に銀時と合流していたため、銀時のいる場所に神楽と新八を案内している形になっている。
ちなみに新八は８というロゴが入った青い半袖の服と黒いズボン。
神楽はいつもの赤いチャイナ服を着ている。

「それより…シロくん長袖の服着てて暑くないの？」

新八は呆れた表情でシロがいつもの長袖の服とズボンという、夏の季節にはチョイスしない服装を着ている姿を見て、暑くないのかと尋ねる。

「大丈夫、暑くないから」

「ならいいけど…」

シロの言葉に新八は答える。

ちなみにシロと作者は一年中、長袖と長ズボンです。

「あれ？文の中になんかいらないものまで入ってきたけど気のせいかな？」

新八は前入ってきた文にいらないものが入ってきたことを感じとる。

「新八何言ってるアルか？とうとう頭が夏の暑さにやられたアルか」

「いや…何でもないよ」

神楽の毒舌の入った尋ねの言葉、何でもないと返す新八。

なぜ新八たちがいるのかというと、学舎の園を見て回りたいと神楽が言ったためである。

普通は生徒や教師、関係者以外は入れない学舎の園であるが、招待したい等という理由があれば立ち入ることができる。

「でも、この学舎の園ってところ、他と比べてみると建物や信号機、標識のデザインが違いますね」

「確かに建物は洋風だね、地面も石畳でできてるし」

新八とシロは学舎の園にある街並みを見ながらいう。新八とシロの言う通り、他の学区に比べると、信号機と標識のデザインは違い。地面はアスファルトやコンクリートでは無く、石畳でできており、建物は洋風の外観をした建物が建っていた。

「あっ！銀ちゃんアル」

神楽はベンチで横になって寝てる銀時の姿を発見する。

「銀ちゃん！さっさと案内…」

神楽は銀時に駆け寄るが銀時の顔を見た途端に表情が固くなる。

「ちょっと！神楽ちゃん待ちなよ…」

新八も神楽のあとを追い、銀時の顔を見るが、神楽と同じように表情が固くなる。

「どうしたの二人共…」

シロは言葉が途切れた新八と神楽が気になり、銀時の顔を見ると神楽と新八と同じように表情が固くなる。

「ん？ふぁ～…なんだオメェらもう来たのか？」

目を開けた銀時は体を起こし、あくびをした後に新八達が来たことを確認する。

「銀さん…その顔…」

新八は恐る恐る指を銀時の顔に向ける。

「あ？顔？ってか何であいつら俺を見て笑ってんだ？」

銀時は首を傾げると、学舎の園にいる女子生徒が銀時を見た途端、なぜか口を抑えて笑っていることに疑問に思う。

「『ツール　ミラー』。銀ちゃんこの鏡で自分の顔を見てみ」

シロは亜神術を使い手鏡をだす。

「ん？…なっ！なんじゃこりゃあああああ！！？」

銀時は鏡で自分の顔を見た途端、叫び声を上げた。

☆

銀時達は学舎の園を歩いていた。ただ銀時だけは顔に仮面ラ〇ダーのお面をつけていた。しかもテンションが低い状態のまま。

「その…銀ちゃん元気出しなよ…」

シロは銀時を励ますが銀時はため息を吐きながらさらに落ち込む。

「ウォッチお前本当に何も見てなかっかたアルか？」

『すいません神楽様、私も寝ていたもので…』

神楽は銀時の左手首についてる腕時計の『ウォッチ』に尋ねるがウォッチはすまなそうな声で答える。

「何で機械が寝るんだよ？」

銀時は元気がない声でツッコむ。

『機械が寝てはいけないなんて決まりどこにもないですよ旦那さん』

ウォッチは理屈っぽい答えを出す。

「ん？あの人…佐天さんじゃないですか？」

新八は前を歩いている常盤台の制服を着ていて青いキャップを被った長い黒髪の少女が佐天じゃないかと尋ねる。

「僕、行ってみるよ」

シロは確かめるため、佐天に近づく。

「佐天さんだよね…？」

「うわっ！？…ってなんだシロくんか…」

シロの言葉に驚き、佐天は後ろを向くが声の主がシロであることを知り、安心する。

「どうしたの？常盤台の制服を着て？それに何その帽子？」

シロは尋ねて佐天の服装と帽子のことを尋ねる。

「ちょ…ちょっと着ていた制服汚しちゃってさ…御坂さんから借りた常盤台の制服を代わりに着てるんだよ」

佐天は少し慌てている素振りを見せながら説明する。

「なるほどね…じゃあ…その帽子は？」

シロは佐天が被っているキャップを指さす。

「えーとそれは…その…」

キャップを被っていることに対してはなぜか答えられない佐天。

「…もしかして…佐天さんも顔にラクガキされたとか…？」

「んなっ！？ち…違うよ…えっ？佐天さんもってどういうこと」

シロの言葉を否定しようとする佐天だが、佐天さんもという言葉に気づき疑問に思う。

「銀ちゃーん、ここにも仲間がいたからもう落ち込まなくていいよー」

シロは顔を銀時のいる方に向け言う。

「えっマジ！？」

銀時はそれを聞くと走りながら佐天に近づく。

「おい、佐天マジなのか！？お前も顔にラクガキされたのか！？」

「ぎ、銀さん！目が回るから止めてー！！」

銀時は佐天の肩を掴みユラユラと揺らす。
佐天は目が回るから止めてと訴える。

「あっ悪い」

銀時はパッと手を離す。

「うえ～気持ち悪い」

「吐かないでね」

「吐かないよ！」

佐天は気分が悪そうな顔で呟くとシロは吐かないでと言う。それに対して佐天は吐かないよとツッコむ。

「佐天はどこをラクガキされたアルか？」
神楽と新八がやって来て、神楽が佐天に尋ねる。

「みんな笑わないでよね…」

「笑わねーよ」

佐天の言葉に、銀時は笑わないと答える。

「じゃあ…」

佐天は帽子を脱ぎ始める。

銀時達の目に入ったのは黒く太い眉毛になってる佐天であった。

「「「「「……」」」」」

四人は佐天の眉を見た。そして出た答えは

「「「何だ、その程度のラクガキ（アル）か」」」

ラクガキに落胆する、銀時とシロと神楽だった。

「ええぇぇぇ！！？」

佐天は銀時達の予想外の反応に驚きの声を上げる。

「ちょっと銀さん、シロくん、神楽ちゃん！失礼ですよ！」

新八は銀時達に注意する。

「いやいや、新八こんな地味なラクガキ銀ちゃんのに比べれば…と

うっ！」

「あっ、こら！！」

シロは言った後、銀時がつけてるお面をとる。銀時は勝手にお面をとったシロに声を上げる。

「うわっ！銀さん何その顔！」

佐天は露になった銀時の顔を見て驚きながら、銀時の顔を尋ねる。

なぜなら、銀時の顔には眉毛は両〇勘吉のような繋がった眉毛のラクガキをかかれ、額にはキ〇肉マンと同じく肉という文字がかかれており、他にもル〇ィの顔のキズやナル〇のヒゲみたいなアザもかかれていた。

「あっ！もしかしたら銀さんも私のに顔ラクガキしたあいつにやられたんだと思う！」

佐天はあることに気づき、銀時に自分をラクガキした相手にやられたと考える。

「あいつ？」

「佐天さんあいつって誰ですか？」

銀時は首を傾げ、新八は尋ねる。

佐天は今までの経緯を話す。

佐天は初春と共に学舎の園を観光するために来たのである（おもにお目当ては学舎の園でしか作られていないケーキが目的だったりする）。

しかし、美琴と黒子が待っている場所へ向かおうとするが佐天は先ほど降っていた雨でできた水溜まりで足を滑らせて転び、佐天が着ていた制服は水浸しになったのである。その際に美琴は常盤台の制服を貸し、佐天が着ていた学校の制服をクリーニングに出したのである。

いろんな所を見て回った後、ケーキがあるお店の中に入るが、黒子と初春はジャッジメントから呼び出され美琴と佐天は二人になる、その時、佐天はトイレに行き手を洗っていた時、トイレの扉が一人でに開き、佐天はそれを不審に思った時、誰かにスタンガンを突きつけられ気絶し、太い眉毛をかかれたのである。

美琴は帰りが遅い佐天が気になり、トイレを見てみるとそこには手洗い場に寄りかかって気絶している佐天の姿を見つけたのである。

そして、佐天を黒子と初春がいる常盤台中学　風紀委員室　へ運びそこで休ませている間、美琴は初春と黒子から学舎の園で常盤台の生徒が佐天と同じように襲われていることを聞く。

三人はその犯人がどのようにして生徒を襲っているかを考え、姿が見えないというキーワードから光学操作系の能力者を探すがそれらの能力者にはアリバイがあり犯行が不可能だと知る。しかし、美琴が被害者には見えなく監視カメラに映っていることと初春と黒子のさりげない一言により、姿を消すのではなく、見ている事に気づかないのではないのかと考える。

美琴の答えで該当する能力者を初春が調べると、該当する能力者が見つかった　能力者の名前は『重福省帆（じゅうふくみほ）』アップスタイルの後ろ髪とは対象的に目元まで隠れるほど長い前髪をした関所中学2年の少女である。レベルは2で能力名は『視覚阻害（ダミーチェック）』対象物を「見ている」という他者の認識を阻害して、「見えない」という認識にすり替え

る能力である。
しかし、自分を直接見ている認識しか阻害できないので監視カメラの映像や鏡に映った姿（佐天は気絶する時、鏡で彼女の姿を見た）は阻害できないため、そこをつき、初春はパソコン数台を使い学舎の園にある監視カメラ２４５８台の映像を入手し、さらに美琴の指示により特定の地区を絞り、その地区で監視カメラの映像を見ている初春の指示のもと美琴、佐天、黒子は重福省帆の捜索にあたって現代にいたる。

「というわけなんだよ銀さん」

「へぇ…なるほど…つまり…そいつが俺の顔にこんなラクガキを」

「銀さん！そいつを捕まえましょう！捕まえてそいつの顔にラクガキをしましょう！」

「おうよっ！！あのクソガキ！今度あったら俺よりひどいラクガキ描いてやる！行くぞ佐天！」

「おうっ！」

何だかんだで心が一つになっている銀さんと佐天さんであった。

（あれ？銀さん常盤台の生徒じゃないよね…じゃあ何で…ん？）

新八が考えてる

ふとシロは前からある人物がくるのに気づく。

それは、目が前髪で隠れるほど長い少女であった。

（あれって…佐天さんが言ってた重福省帆って人かな？特徴あってるし）

シロはそう思いながら、銀時、新八、神楽、佐天を見る、

誰も犯人象と合う彼女に気づいていない様子だった。

（気づいてるのは僕だけか…）

何故シロには見えるのかというとシロには『嫌われ者（ディスライカー）』という万物完全無効化能力があり、認識阻害を無効化しているから見えるのである。

詳しくはリリカル銀魂の嫌われ者（ディスライカー）紹介編を見てください。

（気づかれないようにどうするか…よしこれでいこう）

シロは何かを思いつく。

重福がシロの横を通りすぎようとするとシロは足を出し彼女の足を引っかける。

「きゃあ！」

足を引っかけられた彼女は転び、おまけにシロの『嫌われ者（ディスライカー）』に触れたため転んだ際にダミーチェックが解けた。

「「「「！！？」」」」

銀時、新八、神楽、佐天はいきなり現れた重複省帆の姿を見て驚く。

「銀ちゃん！こいつたぶん例のラクガキ犯だよ！」

シロは起き上がろうとしている重複省帆に指をさし犯人であると言いつける。

「なっ！？」

重複省帆はもう見つかってしまったことに驚く。

「ほう…こいつがそうか…」

「忘れた訳じゃないよねぇ…この眉毛」

銀時は怒りで頭に血管を浮かばせながら言い、佐天はやっと見つけた犯人を見て眉毛を見せつけながら追い詰め喜びの笑いを浮かべ言った。

「くっ！」

重複省帆はこの場にいるのはマズイと思い、姿をくらます。

「なっ！消えやがった！？」

銀時は急に消えたことに驚く。

「本当に消えちゃった…」

佐天も消えたことに感心する。

『感心している場合じゃありません！早く追ってください！』

佐天の耳につけてる機器から初春の声が聞こえ、佐天を早く追うように言う。

「わ、わかった！」

「俺たちもいくぞ！待ってろラクガキ犯！」

佐天の後を銀時たちも追う。

☆

学舎の園の人通りの少ない道路に黒子はいた。

『そっちに行きました』

耳につけている機器から初春の声を聞くと黒子は壁にもたれた。

（この辺り・・・）

タタタッという音を聞いた白井は突然蹴りを放った。

ドガッ

蹴りがあたったのか、見えない空間から音がした。

何もない場所からしりもちして倒れている重複省帆の姿が浮かび上がる。

「今度は何？」

重複省帆は顔をあげるとそこには風紀委員の腕章を見せ付けている黒子の姿があった。

「風紀（ジャッジメント）委員ですの！おとなしくお縄についてくださいまし…」

白井が言い切る前に前髪の少女、重福は能力で姿を消し、走り出す。

「ってつくわけないですわよね……」

「初春、ナビをお願いしますの！！」

『はいは～い』

黒子は初春に消えた重複の位置を特定するための指示を出し、初春は間延びした返事で答える。

そして佐天たちにも指示をだす。

重福は黒子と佐天達から逃れるためにさらに曲がり、複雑な道を通ろうとするが、

その先にいる佐天達を確認すると別の道に逃げ込む。

（なんで？）

闇雲に逃げていてもその先に黒子がいたり佐天達がいたりして通れない。

（なんで！？）

逃げても逃げても佐天達や黒子が待ち構えていた。

やっとの思いで公園に来た重福は目の前のブランコに座っている常

盤台の生徒を見つけた。

耳につけているものを見て、追っ手と思った重福は息を切らしながら構えた。

彼女の逃げ道を断つように白井と帽子を被った佐天と励が追いついてくる。

「鬼ごっこは」

重福の目の前にいた美琴はブランコから降りると、重福のほうを向く。

「終わりよ」

重複の後ろからは追いかけて来た銀時、神楽、新八、シロ、佐天、黒子がいた。

☆

「どうして？なんでダミーチェックが効かないの！？」

ブランコを囲っていた柵を乗り越えた御坂はとぼけてみせる。

「さあね？」

「っ！これだから常盤台の連中は！！」

「あっ！」

ポケットからスタンガンを取り出した重福に対し、危険だと感じたのか、佐天と新八が美琴を心配そうに見る。

だが、黒子は心配は無いような様子で、銀時と神楽とシロはあくびをしていた。

重福は思いっきり地面を蹴り、美琴の懐に飛び込んだ。

「だあああああッッ！！」

バチバチッッ！！

スタンガンを当てた重福はニヤリと笑う。

だが、美琴が倒れないことに疑問を持ち、驚いて御坂の顔を見る。

胸のしたあたりにスタンガンは当たっている。

美琴は顔の前で両手の人差し指をから、少量の電撃を見せる。

「残念。私こういうのは効かないんだよね～」

「え、えっと？……あ」

御坂の人差し指が重福のスタンガンを持っていた手に突きつけられる。

バチチチッ！

「きゃああ！」

重福は気を失い、その場に倒れた。

「手加減はしたからね」

☆

重複を確保した後、黒子が初春にアンチスキルに連絡するよう手配し、ラクガキ事件は終わりを迎えた。

「さ～て、どんな眉毛にしてやろうか？」

「さ～てと…どんなひどいラクガキをしてやろうか？」

佐天と銀時はもはや悪人のような面でペンを持ち、重複に仕返ししようとする。

「ほんとにやるの？」

「銀さんもこれはさすがに大人気ないですよ！」

シロと新八は重複にラクガキをしようとする銀時達を見て、本当にしていいのかと尋ねる。

「何言ってるのシロくん！？やらなきゃだめなんだよ！これは、私の眉毛と銀さんの顔のかたき討ちなんだから！」

「バッキャロォォォォォ新八！これは俺と佐天の問題だテメェは口出すな！！」

佐天と銀時はシロと新八に向かって怒鳴る。

「はぁ…じゃあもう勝手にしてください…」

「ぼくもう知らない」

あまりのアホさに新八は呆れ、シロはもう知らないと言う。

「さ〜て、お覚悟っ！ってえ？」

「どうした佐天…なっ！？」

佐天は重複の眉を変な風にラクガキしようと前髪をめくると、佐天は驚いた表情になる。
銀時も佐天の見てるものを見ると、佐天と同じように驚いた表情になる。

「どうしたんですかって銀さん、佐天さん、これはっ！」

「どうしたアルか？眉毛が両さんみたく繋がっていたアルか？」

「何、何なの？」

俺たちが額を覗き込むと、そこにあったのは変な眉毛だった

「「はぁ？」」

シロ、新八、神楽、美琴、黒子の声がそろった。

「ん、う、はっ！
あんたたち見たのね！？」

目を覚ました重複は、佐天達と前髪が上げられてることに気づき、
前髪を下げ、佐天に背中を見せる。
そして、背を向けたまま眉毛を見たかと尋ねる。

「まぁ、えっと…その」

佐天はどの言葉をかけていいかわからなかった。

「何よ？どうしたの！？さあ笑いなさいよ！」

眉毛を見られてやけくそになったのか眉毛を見せつけ、笑えと声を
荒らげながら言う。

「「……（剃れよ！！！それで解決すんだろ！！）」」

（（この声どこかで聞いたことがあるね（ネ））

佐天を中心に眉毛を見せ付けてくる重福に銀時と新八は心の中でそ
うツッコミを入れることしか出来なかった。
シロと神楽は重複の声が誰かに似ていることに気づき、誰の声なの
かを考える。

重複の過去の話を聞き、今までの動機がわかった。
重複はかつて一人の男性と付き合っていた。しかし、その付き合っていた男性は重複を捨て、常磐台の女子生徒と付き合い始めた。重複は男性を呼び出し、捨てた理由を問い詰めると男性は理由として重複の眉毛が変と言った。
そして、男を奪った常磐台の生徒とこの世の全ての眉毛を憎むようになり今に至る。

しかし過去話をされた挙句、この世の眉毛が憎い！などと言われた四人はどうリアクションしていいかわからずにいる。

「え？えっと・・・変じゃあないよ？」

佐天が言う。

「へ！？」

佐天の言葉に重複は驚く。

「そのくらい・・・その、そう！ちょうど良いチャームポイントだって！私はそれ好きだなあ～！」

佐天は重複の眉毛を褒めた。しかし、どう見てもその場しのぎにしか見えなかった。

「あ……」

佐天の言葉に重福は頬を赤く染めた。

「へ？」

それを見た佐天は口を開けたままポカンとしている。

黒子はそれを見て、腕を組んで得意そうに手を顎に当てると

「罪な女ですわね」

「ええッッ！！？」

「佐天…テメェの趣味をとやかく言うつもりはねー…ただこれだけは覚えておけ俺達はいつだってお前の味方だ」

「「「うんうん」」」

銀時も佐天の肩に手をポンと置きながら言う。

銀時と黒子を除く人達はうんうんと頷く。

「えええええええぇぇぇぇぇぇ！！」

夕暮れ、佐天の声が響きわたる。

重複がアンチスキルに連行される時、佐天に文通をする約束をした

後、重複は銀時を見て何かを言おうとする。

「あ…あの、一つ言っていいですか？」

「なんだ？」

重複の言葉に銀時は尋ねる。

「…私はあなたにはラクガキなんてしてません…」

「え…おま…ちょっと…！？」

重複の言葉に銀時は驚く。

重複はそのまま、アンチスキルによって連れていかれた。

「いったい誰が…」

「じゃあ僕はコレで……」

銀時が呟くと、シロは何故かコソコソと逃げるように去っていく。

ポトリ

するとシロのポケットからペンが落ちた。

「「「……」」」

ペンを見ると全員の表情が凍りついた。

「シロくん、シロくん…ペン落ちたけどこれ何？」

銀時は妙に優しい声でシロに尋ねる。尋ねられたシロはギクッと体を震わせる。

「いや…その…軽くラクガキするつもりだったんだけど調子に乗っちゃって…」

シロは恐る恐る振り向きながら言う。

しかし、銀時からは怒りのオーラが満ちており、新八と神楽は合掌をして、美琴と黒子は銀時の怒りにびびり、佐天は怯えていた。

「（ま…まずい！）イレイズ！」

身の危険を感じたシロは亜神術を使い、自分の姿を消す。

「うそ！？消えた」

「まさか、シロも重複と同じ系統の能力者…」

「それは違います御坂さん、シロくんは能力者じゃなくて亜神っていう神なんです」

その後、新八が美琴達にシロのことを説明する。美琴達は始めは信じられない表情したが、別の世界から来たという銀時もいるためシロが神であることを半分信じたあと…

「ニギャアアアアア！！」

姿を消したシロに銀時は第六感を頼りにシロを捕まえ、ジャーマン

スープレックスをかました。その際にシロは奇声をあげたのは言うまでもない。
その姿を見た美琴達は、本当にあれが神なのかと疑うのであった。

第八訓　顔にラクガキする時にはまずおでこに肉とかけ。（後書き）

質問はまた後程

第九訓　薬には副作用があるものがあるから使用上の注意をちゃんと見てね（並

始まるよ！

今日は大晦日大放出！

第九訓　薬には副作用があるものがあるから使用上の注意をちゃんと見てね

これは風紀委員（ジャッジメント）が９人負傷した連続爆破事件、虚空爆破〈グラヴィトン〉事件を美琴達が事件の犯人を捕まえ事件が解決した。しかし、その事件には疑問の残る点があった、それは犯人である男子学生『介旅初矢（かいたびはつや）』はレベル２の能力者であった。しかし、彼が使用した能力のレベルはレベル４相当であったことである。

これは虚空爆破〈グラヴィトン〉事件が解決して数日のお話。

「はぁ？佐天が悩んでるだぁ？」

とある公園で初春に相談がしたいことがあると呼び出された銀時は怪訝な表情で初春に言う。

「はい…佐天さん、強盗事件があった日に何か様子がおかしかったんです…私、佐天さんがきっと何かに悩んでるではないかと…」

初春は顔を俯かせながら言う。

「佐天さんが悩んでいるのに私…どうすればいいのか解らないんです…」

初春は俯き今にも泣きそうな表情をし、両手の拳を握りしめる。

「……まあ、確かに佐天は自分の能力のことで悩んでいたがよぉ…俺がアドバイスしたら、すぐに立ち直りやがったよ」

銀時は頭をガシガシとかきながら、佐天が悩んでいた理由と悩みを解決したことを初春に言う。

「え？」

初春は銀時の言葉に驚き、顔を上げる。その顔にはもう泣きそうな雰囲気は消えていた。

「それと一つだけ言っておく…困った時はとりあえず笑っとけ」

銀時が初春にアドバイスを送る。

「先生！こんなときくらいは真剣に……」

初春は銀時の言葉が悪ふざけだと思い、怒る。

「ふざけて言ってるわけじゃねーよ」

「？」

銀時の言葉に初春は首を傾げる。

「あいつが落ち込んでる時にお前までしけたツラしててみろマイナスにマイナス掛けるみてーなモンだ」

「先生、マイナスにマイナスを掛けたらプラスです」

銀時が初春に指摘をするが逆に初春に指摘される。

「……」

銀時は初春の指摘に銀時は黙る。

「……あの…銀時先生？」

黙っている銀時を見て、気になった初春は銀時の名前を呼ぶ。

「あいつが落ち込んでる時にお前までしけたツラしててみろマイナスにマイナスを足すみたいなモンだろーが」

銀時は今までのことをなかったかのように言い直す。

（なかった事にしてる！さっきのやり取り丸々上書きして再編集しようとしてる！）

初春は銀時が今さっき言ったことなかったことにしたことを心の中でツッコミを入れる。

「あの…何かすいません、その…どうでもいいことツッコんじゃってい…」

初春はツッコんだことに罪悪感を感じてしまい、銀時に謝る。

「え？何が？ツッコミなんてあったっけ？」

（完全に抹消しようとしてる…恥ずかしい記憶を封印しようとしてる…）

銀時は恥ずかしい記憶を完全に抹消していると悟る初春であった。

「でも…言いたいことは分かりました…悲しみ合うだけが友達の役目じゃない、悲しんでる友達を笑顔にする役目もあるんですよね…」

なんやかんやで初春は銀時が言いたいことがわかり、友達としてのやるべきことを知る。

「あいつは今まさに立ち上がろうとしてんだ…テメーらみんなで支えてやれ、そうすりゃ…アイツもテメーらも真っ直ぐ歩いて行けるからよ」

銀時は初春に微笑みながら言う。

「はい…！でも…元気づけるって何をすれば……私に出来ること…」

初春は何をすれば元気になってくれるかを考える。

「何でもいいだろ、そうだ！お前バンドでもやれよ、可愛い女の子五人組で」

銀時は何でもいいだろうと言った後、思いついたのか手の平をポンと叩きながら、初春にバンドをやらないかと尋ねる。

「え……バ、バンドって？」

初春が銀時が言ったバンドという単語に驚く。

「お前、ボーカルなら売れるんじゃね？オリコン一位二位とか独占するんじゃね？」

銀時が顎に手を当てながら言う。

「もう…そんなあり得ないこと言わないでくださいよ！」

そんなことはあり得ないと思った初春は、若干怒ったような声色で言う。

「あとはあれだ、お前、あの婚后っていう常盤台のお嬢様知ってるか？」

銀時は美琴と同じ常盤台中学の二年生で黒いロングヘアーと高飛車な性格の少女『婚后光子（こんごうみつこ）』の名前を上げる。

ちなみになぜ、銀時が婚后光子のことを知っているかというと常盤中学で黒子と会った際に偶然そこにいた黒子と一緒にいた婚后光子と会い、こういった形で知り合った。

「ええ…まあ…」

初春は婚后のことを知っていると答える。

「なら話しは早い、あいつをキーボードに置いとけ」

「婚后さんを…ですか？」

銀時が婚后を勧めたことに初春は首を傾げる。

「あの高飛車な性格を抑えて髪の毛と眉毛をたくあんの色にしておくのがミソだな」

銀時が婚后の変えるところを言う。

「高飛車な性格を変えるのはともかく眉毛をたくあんってどんな改変ですか！？」

初春は銀時が言った婚后の変えるべき部分の眉毛をたくあんに改変することにツッコミを入れる。

「いーんだよ、バンドってのはそんぐらいインパクトがあったほうが売れるもんなの」

初春のツッコミに銀時はインパクトがあったほうが売れると言いながら返す。

「……（バンドかぁ…でも私カスタネットしか出来ないし…）」

初春は頭の中でカスタネットを『うん、たん』と言いながら叩く自分の姿を思い浮かべる。

プルルル

初春がカスタネットを叩いてる自分を想像していると、初春の携帯電話が鳴り響く。「あっ、私ですね……もしもし？あ、白井さん！…今は銀時先生と……え？はい……分かりました、すぐに向かいます」

初春は自分の携帯電話が鳴っていることに気づくと、携帯電話を手にとりボタンを押し通話する。

通話相手の黒子との会話で何か重要な内容だったのか真剣な表情に

なり、電話を切る。そして、銀時の方を向く。

「銀時先生、時間大丈夫ですか？用事とかありませんよね？」

初春が銀時に時間と用事について尋ねる。

「パチンコ行くってのは用事になんの？」

銀時は頭をかきながら初春の質問を質問で返す。

「なりませんよ！白井さんが聞きたいことがあるらしいくて…」

初春は大きな声でツッコミを入れた後、黒子が銀時を呼び出していること言う。

「……俺なんか誉められることしたっけか？」

銀時は黒子に呼び出された理由を誉めらたことをしたことだと考える。

『……（旦那さん、絶対に違うと思います）』

しかしウォッチはそれは違うと心の中で否定するのであった。

☆

ここは、初春と黒子が所属しているジャッジメント第１７７支部。

そこには、美琴と黒子、初春、銀時と途中で会った新八、神楽、シロがいた。

黒子はレベルアッパーというものを回収していることを銀時達に話す。

「「「レベルアッパー…？」」」

銀時、神楽、新八は聞きなれない単語に首を傾げる。

「ええ…見かけは音楽ファイルですが聞くだけで能力が飛躍的に上昇しますの」

「名前通りだね」

黒子は銀時達にも解るようにレベルアッパーについて説明する。

シロはレベルアッパーの性能を聞き、名前通りだと言う。

「へえ、そりゃ便利なこった……で？何でそいつを回収してんだ？」

銀時がレベルアッパーが便利なものであると感心した後、黒子達『ジャッジメント』がレベルアッパーを回収している理由を尋ねる。

「…効く薬には必ず副作用があるのがお決まりでしょう？」

黒子はレベルアッパーには副作用があることを銀時達に言う。

「副作用って…どんな副作用なんですか、白井さん？」

新八はレベルアッパーにどんな副作用があるのかを尋ねる。

「原因は分かりませんが…命に別状はないのですがレベルアッパー

を使った者全てが昏睡しておりますの。レベルアッパーを使用し虚空爆破〈グラヴィトン〉事件を起こした介旅初矢も病院で昏睡状態になってますの」

黒子はレベルアッパーを使用した時の副作用が昏睡状態になることを説明する。それを聞いた神楽と新八は驚いた表情になる。シロは冷静に黒子の話しを聞いていた。

「マジか、やべーなその…ダウン・アッパー・ブイ・ストームだっけか？」

銀時は一昔前、週刊少年ジャンプで連載していた某野球マンガに出てくる技の名前を言う。

「レベルアッパーです（の）（よ）」

間違って言ってる銀時に黒子と新八はレベルアッパーであるとツッコむ。

「ま…俺ァレベルアッ…ダウン・アッパー・ブイ・ストームなんて知らねーな」

銀時は知らないと答える。

「いや銀さん、今レベルアッパーって言いかけませんでした？

「ワザと言い直しましたわよね？」

新八と黒子は銀時がレベルアッパーと言いかけたこととワザと言い直したことにツッコむ。

「しかしアレか、ダウン・アッ…じゃねえ、虎鉄先輩は音楽ってのはマジか？」
「ついに原型なくなちゃったよ！というかアンタ、今まで何を聞いてたんですか！！」
銀時の言葉に顔に青筋を浮かべながらツッコミを入れる新八。
「（というか虎鉄先輩ってどなたですの？）ええ…音楽を聴いて能力が向上するなど聞いたことが…」
黒子は虎鉄先輩が誰なのかを考えるが、すぐに銀時にレベルアッパーの使用方法を言う。
「まあウォーズマンもバッファローマン戦で１２００万パワーまで出したし？」
「は…？」
銀時が関係ない話しを持ち出したことに黒子は唖然とする。
「そりゃ１００万パワーが１２００万パワーになる件は『え？』ってなったよ？それでも立ったままＫＯされたのは感動したね、さすがウォーズマンって思ったし」
銀時は勝手にウォーズマンの話しを進めていくのである。
「いや…あの、一体何を？」

黒子が関係ない話しをしてる銀時に話しかける。

「そんであの後のバッファローマンの台詞も格好いいんだよな、うんうん」

銀時は今度はバッファローマンについての話し、顎に手を当てうんうんと頷きながら感心する。

「……この人どうにかなりませんの？」

「無理（ですよ）（ネ）（だよ）」

黒子は銀時と長くいる新八、神楽、シロになんとかならないかと聞いてみるが、無理という答えで終わった。

「手がかりなしか…そもそも都市伝説でしかなかったものが実在したなんて…」

黒いセミロングヘアにメガネをかけた、クールビューティーな女性で黒子と初春の先輩にあたる女子高生『固法美偉（このりみい）』はパソコンでレベルアッパーについて調べてたが、結果は手がかり無しに終わる。

「オイ、あの新八二号も何か能力あんの？」

銀時は固法の耳に入らないくらいの声で黒子に固法になんの能力があるのかを尋ねる。

「固法先輩は透視系能力者のレベル3…尊敬出来る方ですの…というか何であのメガネの殿方の名前が出てくるんですの？」

黒子も銀時に小さな声で固法の能力を説明し、尊敬する人物であると言った後、目を細めながら新八の名前が出てきたことを尋ねる。

「あ～なんとなく（透視系って…何かよく見えるようになるアレか？白眼か？）」

銀時はなんとなくと答えた後に、頭の中で透視系の能力を白眼と同じものかと考えていた。

「あなた達も悪かったわね、わざわざ来てもらったのに」

固法は椅子から立ち上がり銀時達を見ながら、軽く謝る。

「いえいえそんな気にしないでください」

「僕たちどうせ暇だったし」

別に呼び出されたことを気にしてない新八とシロは固法に気にしてないことを表すように言う。

「そんなに気にすんなってばよネジ」

銀時も気にしてないことを表すように言う。名前間違ってるけど。

「ネジ？…え？私が？」

固法はネジと呼ばれているのが自分であることを確かめるために自分を指さす。

「ま…冗談はおいといてだ、結構やべーことになってんのか？」
銀時は今までの死んだ魚のような目からではない真剣な目になりながら状況がヤバイのかと尋ねる。
「被害は拡大の一途…はっきり言って良い傾向ではありませんの。正直…私には何故そこまでして能力にこだわるか理解できませんわ」
黒子は今の状況が悪いことを説明する。
そして、どうして能力にこだわるのかと言いながら肩を竦める。
「……」
銀時はとあることを思い出していた。
『それでも…やっぱりレベル０って言うのは辛いんです』
銀時の頭には自分のレベルが低いことがコンプレックスであることを話した佐天の言葉が浮かんだ。
「…俺ァ分からなくもねーけどな」
「？」
「銀（さん）（（ちゃん））？」
能力者でもない銀時の言葉に首を傾げる黒子。
新八達、万事屋メンバーも銀時が口にした言葉に首を傾げる。

「私も……」

初春も佐天が自分の能力のことで悩んでいることを知ったため、初春も銀時と同じ答えを出す。

「初春まで？」

初春も銀時と同じ答えを出したことに驚く黒子。

（佐天さん……）

初春は一人の友のことを思っていた。

☆

同日、某所

「手にはいっちゃった…レベルアッパー…」

佐天は偶然、インターネットでレベルアッパーを入手したのである。そして今、佐天の手にあるのはレベルアッパーのデータが入ってる音楽プレイヤーである。

「これ…本当に効き目があるのかな…本当に能力が上がるのかな……？」

佐天は音楽を聞いただけで能力上がるのかと疑問に思う。

「でも、少し…使ってみようかな…そしたら弱い私でも誰かを守れ

るくらい強く……」

しかし、強くなりたいと思いが疑問を忘れ去せ、佐天はレベルアッパーを使用しようとする。

『弱くなんかねーよ』

使用しようとしたその時、銀時が言った言葉を思い出す。

「！」

銀時の言葉を思い出した佐天はその手を止め思いとどまる。

『テメーには支えてくれる仲間がいるじゃねーか』

「……（やっぱりダメだ…ズルして力を持っても…それは私自身の力じゃないよね）」

銀時に自分には支えてくれる友達がいることを思い出した佐天は、レベルアッパーを使うのを止める。

「データ消去…っと、うーん…やっぱちょっと勿体無かったかな？いやいや！こんなのに振り回されてるようじゃダメじゃんか佐天涙子！」

佐天はレベルアッパーのデータを消去する。消去したことを少し後悔するが、すぐに首を横に振りながらレベルアッパーに振り回されている自分に説教する。

☆

そして場所は変わって、ジャッジメント１７７支部

「何にしても……専門家の意見が聞きたいところね、情報が少なすぎるわ」

固法は情報が少ないため、専門家の意見を聞くべきだと言う。

「では私は病院に、何か分かったかもしれませんの」

「あ、じゃあ私も一緒に行くわ」

「私も行くアル、ビリビリ」

「誰がビリビリよ！」

「この二人じゃ心配だから僕らも行こうよ新八」

「確かに心配だね…わかったよ」

黒子、美琴、神楽、新八は病院に行こうとする。

「じゃあ俺はちょっくらパチンコに、今日はパチンコの女神が呼んでるから出るかもしれねー」

銀時は一人だけパチンコに行こうとしてた。

「…あんたも来るのよ、一応教師でしょ」

「銀さん、あんたも来てください」

「パチンコの女神のもとより白い亜神と一緒に病院、行こうね～」

「ええ～」

銀時は美琴、新八、シロに背中を押され、一緒に病院に行くのであった。

その時、銀時は残念そうな声を出していた。

第九訓　薬には副作用があるものがあるから使用上の注意をちゃんと見てね（後

『教えてシロ先生！』

シロ「え～ルシフェルさんから質問」

1　レールガン４人組に質問
万事屋（シロ含む）の第一印象は？

2　万事屋（シロ含まない）に質問
超能力が使えたとしたらどんなのが欲しい

シロ「1の答えは…」

美琴「アイツ（銀時のこと）は…大人気もないしだらしないし変な内容の授業をするし、見習いたくない大人の見本ね…まあたまに頼りになるところはあるけど
新八さんは大人しそうだけど、地味そうな人ね…
神楽は…私のことをおちょくる生意気な小娘ってところね
シロは神だって言うことには驚いたけど基本普通の人間と変わらないわね」

黒子「銀時先生ですか…そうですね～頼りになりますが基本ダメ人間のオーラが出ていますの
志村さんは礼儀は正しいですが銀時先生に振り回されている苦労人ってところですわね
神楽さんはお姉さまをおちょくる小生意気な小娘ってところですわね

シロさんは神であることには驚きましたが…悪い人じゃなさそうですわね」

初春「銀時先生のことですか…最初は怖かったけど話して見たらおもしろい人かなって…志村さんはお互い妙に近い親近感を感じますね…神楽さんは何か白井さんと同じ雰囲気を漂わせていました…シロさんは神様ってことに驚きました、でも威厳がこれっぽっちもないんですよ」

佐天「銀さん？おもしろいしいろいろ頼れる人だと思うよ？新八さんは、地味そうで銀さんや神楽ちゃんに振り回されている苦労人かな？神楽ちゃんは銀さんのことを大切に思ってる人だと思うよ…ボコボコにしてたけど…
シロくんが神様ってことには驚いたよでもお菓子の話しに熱中してたから普通の人と変わらないんだな～と思ったよ」

シロ「2の答え」

銀時「断然髪の質を変えてサラッサラヘアーにする能力…あ…でも甘いものを無尽蔵に生み出す能力がいいな～」

神楽「私は酢昆布と海苔の佃煮がのかったご飯を無限に生み出す能力がいいネ！」

新八「僕は存在感を上げる能力が欲しいです…」

…「以上ではまた来年」

続く

第十訓　冷房をつけないと熱中症になるから気をつけろ（前書き）

続くよ！

第十訓　冷房をつけないと熱中症になるから気をつけろ

☆

ここはとあるレベルアッパー使用者が入院している病院。
銀時達は今、レベルアッパーのことで何かわかったことがあるか医師に事情聴衆をしているところである。

「すみません…まだ何も……正直私たちの手には余りますね、何度調べても患者の身体には何も異常が見られない…意識だけが失われている」

医師はレベルアッパーを使用した患者のカルテ見ながら答える。

「そうですか…」

美琴は残念そうな顔をする。

「ですから、外部より専門家をお呼びしています」

「専門家…？」

医師が専門家を呼んだことを告げると美琴は首を傾げる。すると、廊下の奥から足音が聞こえてくる。

「どうも…水穂機構病院院長より招聘を受けて参りました…木山春生です」

そこには白衣を着て、白衣のポケットに手をつっこんだボサボサな

栗色のロングヘアーと目の下のクマが目立つ女性が立っていた。

「……（……こいつァ大物だな）」

目の前の暗い雰囲気の残念美人の女性を見て、銀時は大物だと推測する。

「……（…あの人、目の下のクマがすごいけど…寝る間を惜しむほどのすごいことをしてるのかな？）」

シロも木山を見て、推測する。

「お疲れ様です」

医師は軽く木山に挨拶する。

「お話は伺っています…早速ですが患者を見せていただいても？」

「はい、こちらへどうぞ」

木山が医師に患者を診察したいと頼むと、医師は患者がいる部屋へと案内する。

「あの、診断が終わったら私たちにもお話を聞かせていただけないでしょうか？」

美琴は木山に話しかける。

「君たちは…？」

木山は初対面の美琴たちに誰かと尋ねる。

「ジャッジメントの白井黒子と申します」

「常盤台中学の御坂美琴です」

「志村新八です」

「神楽アル」

「火影のシロでーす」

「海賊王のキャプテン　銀時で…」

ドカッバキッ

美琴、黒子、新八、神楽がちゃんと自己紹介をしているのに対し、シロと銀時がふざけた自己紹介をする。その後、美琴が銀時を新八がシロの頭をたたく。

「教師やってます坂田銀時です」

「坂田銀時さんの家でお世話になってるシロです」

大きなたんこぶができた銀時とシロは今度は正しい、自己紹介をする。

「まったく…あんた達の脳も一度見てもらったらどうなの？」

「見てもらったところで、もう手遅れアル」

美琴と神楽は呆れた表情で銀時とシロを見る。

「にしてもいきなり殴るってなくね？」

銀時はいきなり殴ったことの文句を言う。

診察に行った木山を待って数時間が過ぎた。

「待たせてしまってすまないね…予定より診断に時間が掛かってしまった」

木山がやってきて謝ったあと、遅くなった訳を話す。

「私たちは構いませんの、それより…診断結果を教えていただいても……？」

黒子は診断の結果を木山に尋ねる。

「別に構わないがそれにしても…ここは暑すぎないか…？」

木山は診断結果を教えることを承諾し、手であおぎながら暑すぎないかと尋ねる。

「言われてみれば…確かに病院の割には冷房の効きが悪すぎますわね……」

黒子は冷房の効きが悪いことに気づく。

「ちょっと待っていてくれ、すぐに脱ぎ終わる」
木山は着ている服を脱ぎ始める。
「え、ちょ…ちょっと…！」
「なっ…何をいきなり脱いでおりますの！？」
「ちょっとストップ！ストップ！人前ですよ！」
美琴、黒子、は顔を赤くしながら木山が上着を脱いだことをツッコミ、新八は慌てながら脱ぐのを止めるように言い、黒子は木山が脱いだ上着を元に戻す。
神楽とシロは鼻くそをほじっているだけであった。
銀時は考えた後、どこかに行く。

「どうした？暑いから服を脱ぐ…何か私は間違ったことをしているのか？」
木山が脱ぐのを止め、新八達に尋ねる。
「人の目というものがありますよ！」
「それに、殿方もいるのですよ！？」
新八と黒子は木山にツッコむ。
「……メガネのキミや白髪の少年はともかく、あの白髪の彼なら私

には目もくれずに別の看護婦と話しているじゃないか」
木山は看護婦と話している銀時を指さす。
「ほ、本当ですわね」
木山は看護婦と話している銀時を指さす。
「ほ、本当ですわね」
「…てっきり下着を凝視するものかと……」
黒子と新八は銀時の行動に驚いていた。
（フェイトの裸見て懲りたからかな？）
シロは銀時が間違ってフェイトの裸を見た時のことを思い出しながら思う。
「こ…この真夏日に寒気がするんですか？」
看護婦は困った表情で銀時に尋ねる。
「寒いんす、もうガンガン暖房つけちゃってください、南国のハワイ並で」
なぜか銀時は夏なのに暖房をつけてくれと看護婦に頼む。
「いやさすがにこの時期に暖房はちょっと…」
看護婦は苦笑いを浮かべながら答える。

「もう裸になってリンボーダンス始めたくなるくらいの温度にして欲し…」

「「アンタは下着も脱がす気なのかゴラァァァァ！！」」

「ズッコク！！」

銀時の発言に新八と美琴は顔に青筋を浮かべながらツッコミ、銀時に向かって跳び蹴りをはなつ。
蹴られた銀時は変なことを言いながら病院の壁に叩きつけられる。

「さて…私に何が話があるんだったかな？」

木山は美琴達に何が聞きたいのかを尋ねる。

「ダウン・アッパー・ブイ・ストームについて話を聞きて…」

復活した銀時は事件に関係無いことを話そうとする。

「「違う！」」

新八と美琴はツッコミながら銀時の頭を叩く。

「ダウンアッパーブイストーム…名前から察するに下方から上に…」

木山は銀時の言った言葉を推測しようとする。

「いやあなたも真剣に考える必要はありませんの」

黒子は真剣に推測しようとする木山にツッコむ。

（この人、意外に銀ちゃんの世界に馴染むかも…）

シロは木山が銀魂に馴染む人物であると考える。

「ああ…ドラゴンボールにおける戦闘力のインフレーションついて…だったかな？」

「おっ…お前結構イケる口だな、俺と一杯ひっかけながら議論しねーか？」

木山がドラゴンボールの話しをすると、銀時も参加して議論しないかと尋ねる。

「「「……」」」

美琴、黒子、新八は呆れた表情になり、神楽はあくびをして、シロは興味津々な目で銀時達を見てた。

「話を戻して…レベルアッパーと言うものをご存知で？」

話しを戻した黒子はレベルアッパーのことについて尋ねる。

「すまないが…それも初耳だな」

木山はすまなそうに知らないと答える。

「招集時に聞かされておりませんの？」

黒子は木山が病院に招集された時に聞いていなかったのかと尋ねる。
「体に異常の見られない意識不明者が続出している…とだけしか聞いていないな…それでレベルアッパーとはどういったものなんだ？」
木山は招集された時に聞かされたことを黒子に言った後、レベルアッパーがどういうものなのかを尋ねる。
「聞くだけで能力が向上する音楽ファイルとでも申しましょうか…」
黒子はレベルアッパーの性能を木山に話す。
「聞くだけで？……ふむ、面白いな…それと今回の昏睡者たちが関係していると？」
レベルアッパーの性能に興味を持った木山は、昏睡者と関係しているのかと尋ねる。
「調べてみたら…意識を失っている人はみんなレベルアッパーの使用者なんです」
美琴は木山に昏睡している人間はレベルアッパーの使用者であることを話す。
「なるほど…興味深いな、私としても是非調べさせてほしいよ」
興味を持った木山は、調べたいと自分から言う。

「それじゃあ…何か分かり次第すぐに連絡しよう」
木山は美琴達に分かったことがあったら連絡すると告げる。
「はい、よろしくお願い致しますわ」
「ああ…じゃあまた……」
黒子の言葉に答えると、木山は踵を返しこの場を立ち去る。
「……」
「…どうしたんですか銀さん？」
「さっきから黙りこくって」
黙って木山を見ている銀時に新八と美琴はどうしたのかと尋ねる。
「ん？…いや、なかなかすげー奴がいたもんだと思ってよ」
銀時は自分の世界、木山がただ者ではないと言う。
「確かに変わってるけど…良い人じゃない？」
美琴は木山を変わってるが良い人だと捉える。
「ばっかオメー、あのクマ見ただろうが」
銀時は木山のクマについて話す。

「それがどうかしたんですか銀さん？」

新八は銀時がクマのことを話したことに首を傾げる。

「目の下にクマがある奴は総じて大物なんだよ、『我愛羅』とか『L』とか」

銀時は目にクマがある奴は大物だと豪語し、例として同じジャンプキャラクターを使う。

「いや…え？」

「それは…ちょっと」

銀時の話しに美琴と新八は若干呆れる。

「アイツ…何か一発デカいことやらかすんじゃねーか？」

銀時は木山がデカい何かをやるのではないかと推測する。

「……そんな予想どうせ当たらないわよ」

美琴はどうせ当たらないと銀時に言う。

その後、用事を済ませた美琴達はジャッジメント177支部へと銀時達はマンションへと帰っていったのである。

『（というか私の出番なかったな…）』

ウォッチは自分の出番が無いことを呟くのであった。

第十一訓　急に力を手にいれた奴って高確率で調子のるよね

数日後、ジャッジメント第１７７支部にて、美琴達と成り行きで来ていた銀時達はレベルアッパーの情報を探していた。
そして初春はインターネットからレベルアッパーを音楽プレイヤーにダウンロードしていた。
無論使用するためではなく情報が本当かどうか確認するためである。

「完了っと」

初春はダウンロードを終えたことを口にする。

「でも曲を聴くだけでレベルアップだなんて…ホントにそんなことあるんですかねぇ？」

初春はダウンロードしたレベルアッパーの性能の胡散臭さを口にする。

「善意の情報提供者はそう言ってましたわ」

黒子は問題ないと言う。
ちなみに善意の情報提供者というのは前日、黒子が捕まえたレベルアッパーを売っていた不良グループである。
神楽と新八も初春がダウンロードしたレベルアッパーを見にやってくる。

「正直、眉唾物というか…はっ！？これを使ってもし白井さん以上

の能力者になったら今までの仕返しにあんな事やこんな事…神楽さんにもいつもからかわれてるから神楽さんにもあんな事も…」

初春は先ほどダウンロードしたレベルアッパーが入っている音楽プレイヤーを見ながら握りしめてニヤニヤし始める。

「思考がだだ漏れですのよ」

「おい、口に出てるぞ花瓶」

黒子と神楽が初春に言うと、初春は我に帰る。

ちなみに神楽が初春のことを花瓶っていうのは新八にメガネと言ってるのと同じことである。

「わたくしに恨みを晴らしたいのならぜひ」

「私に仕返しするなんて千年早いアルよ花瓶」

イヤホンを音楽プレイヤーに取り付けて、初春の右側の耳に神楽、左側の耳に黒子がイヤホンをつけようとする。

特に黒子は笑顔のせいで恐怖は倍増である。

「はうぁっ！うそです！うそですよー！」

「ちょっと、二人共止めなよ！」

耳に装着せんとするイヤホンを持つ黒子と神楽の腕を止め涙目で抵抗する初春と神楽と黒子を止めようとする新八。

プルルルル

その時、電話がなり、黒子は自分の携帯電話をとる。

「携帯なってますよ。携帯！」

初春が焦りながら携帯がなっていることを黒子に知らせる。

黒子の携帯がなって命拾いしたことにハァーと息を吐き胸を撫で下ろす。

神楽も興味がなくなりイヤホンを離す。

「もしもし……はい…分かりました…すぐに、また生徒が暴れているらしいですの、初春は木山先生に連絡を」

黒子は会話を済ませると、会話の内容を全員に伝え、初春に木山に連絡するように指示する。

「はい！」

初春は力強く答える。

初春が答えると黒子は部屋から出ていく。

「……」

銀時は黙ったまま出ていった黒子を見た。

☆

同日、とある路地裏。

「うぐっ！」

黒子は何者かの攻撃を受け、地面に倒れる。

「へっ…どうよ、俺の力は！」

黒子を攻撃した大柄な体格のスキンヘッドの学生は自分の力を自慢する。

「やはり手こずり……」

黒子は忌々しそうに生徒を見るが、生徒を見た途端に黒子の表情が少し驚いた情に変わる。

「どうしたよ、黙りこくって…ビビっちまったか？」

「…後ろ、見た方がよろしいですわよ」

生徒の質問に黒子は後ろを見るように進める。

「へっ、注意を逸らそうってのか？その手には……」

バキッ

生徒が言おうとした途中、何かに乾いた音がした途端、生徒が前のめりに倒れる。

「ったく…図体ばかりデカいだけかよ」

倒れた生徒を叩いた相手は、木刀を片手に持った銀時だった。
銀時の他にも新八、神楽、シロの万事屋メンバーがいた。
「銀時先生に志村さんに神楽さんにシロさん！？…なぜあなた方がここに？」
黒子が銀時達がいることに驚き、なぜここにいるのかと尋ねる。
「散歩だよ、散歩」
銀時はそんなふうに答えるが、新八、神楽、シロは素直じゃないなーと言いたそう顔をしていた。
「まあまあ……こんな狭い裏路地を散歩だなんて変わったご趣味ですこと」
本当のことを言わずに散歩と言った銀時に、黒子は立ち上がりながら皮肉を言う。
「手伝ってやったんだしちったァ感謝しろよ」
銀時は助けたことに感謝しろと言う。
「お礼は言っておきますが…これはジャッジメントの仕事ですので、関係のないあなた方はここでお引き取りください」
黒子は銀時にお礼を言った後、関係の無い銀時達に戻るように言う。
「生徒が怪我しねーように守んのは教師の仕事なんだよ、面倒くせーけど」

ただで帰るわけがない銀時は、生徒が怪我しないように守るのが教師の役目と言いながらこの場に残ろうとする。

「し…しかし……」

黒子は銀時が手伝うことに躊躇する。

「あーもう細けぇこたはいいんだよ」

躊躇している黒子を見て、痺れを切らした銀時は気にするなといい。

「……何というか、あなた本当に飄々としてますのね」

黒子は銀時の態度を見て、飄々としていると言う。

「そんな褒めんなって」

「褒めたかどうかは微妙なラインですの」

銀時が誉めるなと言うと黒子は苦笑いを浮かべながら言う。

「銀ちゃん、銀ちゃん後ろ後ろ」

「あっ？後ろ？」

シロが後ろを向くように言うと、銀時は後ろを向く。

「おいおい、あのジャッジメントと一緒にいる銀髪見てみろよ。あ

の御坂美琴のレールガンを弾いた男だぞ！」

「じゃあ、あいつも倒したら俺らの名前も上がる訳か！」

「「「「「……」」」」」

銀時達は四人の不良学生を無言で見つめた。
どうやらレベルアッパー使用者が狙っているのは、ジャッジメントや高レベルの能力者ではなく、美琴のレールガンの弾いた銀時も対象に入ってるようである。

ドカッ！バキッ！クベッ！ドシャッ！ガバッ！

「おーし、次行くぞ」

銀時はシロ達に行くように指揮しながら次の現場へ行こうとする。

「「「うぃーす」」」

新八、神楽、シロは返事をすると銀時に付いていく。

「何であなたが仕切ってるんですの？」
黒子は新八達と一緒に歩きながら銀時が仕切ってることをツッコむ。

そして、銀時が去った場所には銀時にボコボコにされボロ雑巾になって気絶している不良学生がいた。
全員もれなくジャッジメントの手錠付き。

☆

銀時達は所々歩いていると勝負を突きつけられた。
だが、いくつもの修羅場を乗り越えてきた万事屋メンバーにとジャッジメントの黒子にはレベルが３程度の能力者なら別に敵ではなかった。
そして倒された能力者は黒子に捕縛されてしまいました。

「うがっ…」

とある駐車場にて、銀時達を襲った不良メンバーの最後の一人が銀時の木刀で叩かれ、戦闘不能になる。

「しつこいなぁもう！」

シロは襲ってくる生徒の数が多いことに怒る。

「…ねえ、これで何人目？全然キリがないんだけど？」

「え、ええ…そうですわね（この方々…レベル３並の能力者を次々と…ほとんど手傷も負わずに……）」

黒子は銀時達がレベル３並みの能力者をほとんど手傷を負わずに木刀や傘で叩く一発で倒していることに驚き、銀時達の実力に感心する。

（特にこの方は一体…何にしても、評価を改める必要が……）

黒子は銀時を見て改めて評価するかと考える。

「いいよもう面倒くせー、後は他の奴らに丸投げしてパフェでも食って帰ろうぜ」

「銀さん、さっきかっこいいこと言っておいて、何エスケープしようとしているんですか！」

「…ちょっと見直したと思えばこれですの」

さぼろうとしている銀時を新八が叱る姿を見て、黒子は落胆する。

「コンビニで何か買ってくるけど誰か一緒に来てくれない？」

「酢昆布食べたくなったから私行くネ！」

「じゃあ、僕も行こうかな？」

シロがコンビニに行かないかと尋ねると、神楽と新八が一緒に行くと答える。

「俺は残るわ、だから新八あとでチョコアイス買ってこい」

「わたくしもここで待っていますわ、あとわたくしにはレモンティーをお願いします」

捕まえた学生が目を離した隙に他の仲間が助け逃げる可能性があるため銀時と黒子はここに残ることを新八達に言う。ついでに買ってきて欲しいものも口にする。

「はいはいわかりました」
新八はそういいながら、シロと神楽と共にコンビニまで走っていく。
「しかし…何故レベルアッパーを使用した人間は容易に犯罪に走るのでしょう？」
黒子は捕縛した学生を見ながら疑問に思ったことを言う。
「今も昔もそんなもんだ、デケェ力持った奴は総じて何かやらかすもんよ」
銀時はかつて会った力を持ち何かをした人物達を思い出しながら言う。
「その力をどうして有効に使えないのか…私は疑問ですわ」
疑問に思ったことを口にする黒子。
「俺たちゃ、そんなにつえー生き物じゃねーんだよ」
「？」
銀時の言葉に首を傾げる黒子。
「この世に欲のない人間なんざいねェ…誰でも多かれ少なかれ持ってるもんだ」
「まあ…それは確かに……」

銀時の言葉が正論であるため黒子は反論する言葉がなかった。

「金が欲しいとか甘いモン食いてぇとかストレートパーマになりてぇとかパチンコで大勝してぇとか…」

銀時は思いつく欲を言葉に出す。

「それはあなただけですの」

黒子は銀時の出す欲の例えが銀時の欲であることを知り、その欲にツッコむ。

「…コイツは俺の勘だけどな…」

「無視ですの？」

銀時は黒子のツッコミを無視して、違う話しをする。黒子は無視されたことをツッコむ。

「…レベルアッパーってのを使った奴ってのは…てめーに自信がねェ奴じゃねーか？」

銀時は勘ででた答えを黒子に言う。

「自信…？」

黒子は銀時の言葉に首を傾げる。

「ここじゃ能力が使えねぇ奴は肩身が狭い思いしてるんだろ？」
銀時は佐天の言ったことを思い出しながら、学園都市では能力の低い人間の大半は自分に自信がない奴がいることを指摘する。
「そんな…私は能力で他人を判断したりなど絶対に…」
「確かにお前がそうなことをする奴じゃないことはわかる…だがよ、お前がそうでも本人は気にしちまうもんだ…能力使えねー自分を責めちまうんだよ」
黒子の友人関係を見ている銀時は黒子がそんな奴ではないと言ったあと、銀時は能力が使えない自分に悩む人間がいることを黒子に説明する。
「……レベルアッパーを使ってしまう方の思いは分かりましたの」
黒子は銀時の言葉でレベルアッパーを使う人間の思いを知る。
「ですが…なぜせっかく手に入れた力で犯罪を犯すのでしょう？」
思いを知った黒子だがいまだにやっとの思いで手に入れた力を犯罪を犯すのかと疑問に思う。
「…さっきも言ったけどな、俺ぁ何の能力もねえただの一般人だ。けど…日常生活を不便だと思ったこたァ一度もねえ、つまりはそういうことだ」

銀時は能力が無くとも、日常生活を不便だと思ったことは一度もないと黒子に言う。

「？……言っている意味が今ひとつ分かりませんの」

銀時の言ってる意味がわからない黒子は銀時にわからないと答える。

「日常生活でドラゴ〇ボールの能力使う機会なんざほとんどねーだろ？瞬間移動は便利そうだけどよ…魔貫光殺砲が役立つことはないんじゃねーか？」

「例えが極端ですが……まあそれもそうですわね」

銀時の例えに呆れる黒子だが、最終的に納得する。

「ただ…魔貫光殺砲にだって使い道はある、美琴のレールガンみてーに強盗捕まえたりな。けどよ…それはアイツが強盗をする立場になったとしても使えるだろ？」

銀時は美琴のレールガンの使い道が善にも悪にもなることを黒子に説明する。

「いや…むしろそっちのほうが使い道が多いかもしれねぇ…（実際バズーカ使って破壊活動してる警察もいるし）」

銀時は江戸の治安を守る武装警察『真選組』の一番隊隊長　『沖田総悟』が犯罪者を捕まえるためにバズーカを使用して、発射されたバズーカの弾が建物にあたり建物が破壊されるという過去に起きた

出来事を思い出す。

「犯罪行為ならば…能力を大っぴらに使用出来る快楽と共に利益も得られると」

「言いたかねーが…まあそういうことだな」

黒子は銀時の言葉を解釈し、銀時はそういうことになると言い答える。

「そういった方を止めるに……私たちは何をすべきなんですの？」

「……そいつはテメー自身で考えねーとな」

黒子の問いに銀時は自分で考えなと言う。

「……（私に…出来ること……）」

黒子は考えたレベルアッパーを使用して犯罪に走った人間をどう止めるかを。

「…私はまだ答えを出せませんの」

黒子は口に出したが答えは出てないと言う。

「だろうな…俺だってそんなの簡単に分かりゃしねぇ」

銀時は自分にも簡単にも分かるわけがないと答える。

「ですが…今の私に出来ること、つまりは暴走している生徒を止めること…それに全力を尽くしますわ…！」

黒子は決意が宿った目をしながら銀時に今、自分にできることを言い、それに全力で尽くすことを銀時に告げる。

「……そうか、頑張れよ」

銀時は手を上げヒラヒラさせながらこの場を立ち去ろうとする。

「いやあなた何を普通にサボって逃げようとしてますの」

黒子は銀時の服を掴み、銀時が去るのを阻止する。

「今そういう空気だったじゃん！完全にフェードアウトして良い流れだったじゃん！」

銀時は黒子に向かって叫ぶ。

「……本当に評価していいか迷う方ですわね」

黒子は呆れた表情を浮かべながら銀時を評価していいのかと迷うのであった。

この後、新八達が帰ってきて、レベルアッパー使用者達をアンチスキルに渡したあと、銀時達はジャッジメント177支部へと帰っていったのである。

第十二訓　大切な話ししてる時は寝るな！

黒子と一緒にレベルアッパーの使用者を捕まえて数日後…
黒子が出かけたあと、初春は木山に音楽プレイヤーで能力向上は可能かと尋ねるが、木山は音だけでは能力に関わる五感に働きかけることが難しいため「難しいね。『学習装置（テスタメント）』ならいざ知らず」と答えた。そのためレベルアッパーの仕組みは謎のままである。そして今現在、美琴がレベルアッパーの曲自体に五感に働きかける作用がないのではないかという推測を立てる。そして出た答えが…

「共感覚性…ですか？」

初春は美琴が出した答えを口に出す。

「なるほど！音で五感を刺激し脳を活性化させているなら…」

黒子も音で脳を活性化させていることに気づく。

「演算能力が向上して能力が上がる可能性があるってこと！」

美琴は脳が活性化することによって演算能力が向上し能力が上がる可能性を示す。

「な、なるほど…木山先生に聞いてみます！」

初春は感覚覚性のことを聞くため木山に電話をかける。

☆

初春は今、木山に通話中。

『なるほど……その可能性は見落としていた、すぐに調査してみよう』

初春の携帯電話から聞こえてくる声の主、木山は共感覚性のこと見落としたことを言った後、すぐに調査を行おうする。

『それならばおそらく樹形図の設計者（ツリーダイヤグラム）の使用許可も下りるはずだ』

木山はレベルアッパーの調査に樹形図の設計者（ツリーダイアグラム）を使う可能性があることを言う。

「樹形図の設計者（ツリーダイアグラム）ですか！わ、私もご一緒させてもらえませんか？」

樹形図の設計者という単語を聞いた初春は目を輝かせながら、一緒に同行していいかと尋ねる。

『ああ…構わないよ…』

木山は構わないという言う。

「……（ねえ…会話が全然分からないだけど？演算能力？樹形図の設計者（ツリーダイアグラム）？何それ？）」

「……（僕もわかりませんよ銀さん…ただわかることは僕たちの入り込む余地がないことです）」

「……（確かにそうネ、私たち全然、場違いアル）」
「……（樹形図の設計者（ツリーダイヤグラム）は正しい入力をすれば未来予測がなほどの性能をもつ学園都市が誇る最高のコンピューターで演算能力は能力者がよりすごい能力を使用するために必要な能力だよ銀ちゃん）」
「……（あ～なるほど、説明ありがとうシロくん、やっぱ亜神の名は伊達じゃねーな）さてと今週のＢＬＥＡＣＨでも見るか」
銀時達、万事屋メンバーはテレパシー並みのこそこそ話す。
銀時は話し終える手に持っていた読みかけのジャンプを読もうとする

☆

初春が木山の所に行き、初春を除く風紀委員（ジャッジメント）１７７支部にいる全員は待機中。
「初春が帰ってくるまではしばらく待ちですわね……しかし」
黒子は初春の帰りを待つ発言をした後、ジト目である場所を見る。
「藍染くそ強ーなオイ…まあ夜一さん来たし俺としちゃイヤッホーな感じだけど」
そこには椅子に座ってジャンプを愛読している銀時がいた。
「あ、ジャンプ読んでるの？読み終わったらあとで私にも貸してね」
美琴は銀時にジャンプを読み終わったら貸してと頼む。

「いいぜ。つーかこの藍染様の変身は失敗じゃね？見ろ、パペットマペットだもんよこれ」

銀時は了承すると、ＢＬＥＡＣＨのページを見ながら、藍染の変身の感想を言う。

「どれどれ……んー…インパクトはある…のかな？」

美琴は銀時の後ろからジャンプを覗き、どういう感想を述べていいのかと迷う表情をしながら言う。

「こりゃアレだ…フリーザ様最終形態みたいな感じを出そうとして失敗したんだな」

銀時はとあるメガヒットマンガの悪役を例に使いながら感想を述べる。

シロと神楽、新八たちは…

「うぎゃーまたババ引いた！」

「シロくん今日は運が悪いね、これで８回目ですよ」

「おっ！そろったネ！これで上がりアルよ！」

ババ抜きをやっていた。

「待つにしても…この緊張感のなさはさすがに問題な気が……」

黒子は銀時達の緊張感の無さにため息を吐く。

「みんないる！？」

黒子がため息を吐いてるとレベルアッパーの情報を集めるために病院に行ってきた固法が扉を開き、入ってくる。

「こ、固法先輩？」

黒子はいつもと様子が違う固法に驚く。

「どうしたんですか固法さんそんなに急いで？」

新八、神楽、シロはババ抜きを止めいつもと様子が違う、固法にどうしたのかと尋ねる。

「トイレアルか？」

「ちょっ、神楽ちゃん！」

神楽のデリカシーの無い発言を新八が注意する。

「そうなの…実は急にお通じが…って違うわよ！」

固法がノリツッコミをする。どうやら違うようだ。

「見たい番組を録画してないことに気づいて急いで録画しに戻ってきたとか？」

「そうじゃなくて…実は重要なことが分かっ……」

シロの発言を否定した後、固法は真剣な表情で重要なことを言おうとするが…

「馬鹿かお前！夜一さんが最高に決まってんだろ！」

「私は雛森の方が好きよ！」

銀時と美琴のＢＬＥＡＣＨ談義によって阻まれてしまった。

「たんだけど……何やってるのかしら？」

固法は阻まれ発言をした銀時と美琴を見ながら言う。その後、銀時と美琴に近づく。

「あの…どうかお怒りにならずに…」

「固法さんどうかここは落ち着いてください」

黒子と新八は阻まれたことに怒ってると感じとり、固法の怒りを鎮めようとするが…

「ＢＬＥＡＣＨじゃ七緒ちゃんが一番可愛いじゃない！」

固法もＢＬＥＡＣＨ談義に入り自分が好きなキャラクターの名前を言う。

「「固法（先輩）（さん）！？」」

新八と黒子は固法の意外な行動に驚く。

☆

「まったく…ジャッジメントの支部で何をやっているの！」

ソファーに座りながら固法は腕を組みながら向かいのソファーに座ってる美琴と黒子と銀時、銀時たちが座ってるソファーの横に置いた椅子に座ってる新八、神楽、シロに説教する。

（いや固法先輩も乗っていたような…）

黒子は心の中で固法の行動にツッコむ。

「すいません…それで、重要なことって何なんですか？」

美琴は謝った後、固法が言った重要なことを尋ねる。

「そうだったわね…実はレベルアッパー使用者には共通の脳波パターンがあることが判明したわ」

固法はレベルアッパーには共通の脳波パターンがあることを美琴たちに告げる。

「「脳波パターン？」」

脳波パターンという単語に新八と神楽は首を傾げる。

「それは…つまり…？」

「他人の脳波パターンで無理やり脳が動かされているとすればどうかしら？」

わからない様子の黒子と美琴に固法は脳波パターンで脳を無理やり動かしたらどうなるかと聞く。
「そんなことしたら脳に負担がかかって…ま、まさかそれのせいで……？」
美琴は脳に負担がかかることを答えた後、何かに気づく。
「どういうことアルか美琴？」
話しがわからない神楽はどういうことなのか美琴に尋ねる。
「人間の脳波は人によって違うパターンで動いているのよ…それを無理やり他人の脳波パターンで動かしたら、脳に負担がかかって昏睡状態になるってことよ神楽」
美琴は神楽に他人の脳波パターンで動かした時に起こる脳の負担で昏睡状態になることを言う。
「一体誰がそんなことを…」
「…先生はどう思われます…ってあれ？先生？」
新八は顎に手を当て考え、黒子は銀時に尋ねる。
「Ｚｚｚ……Ｚｚｚ……」
しかし、銀時は難しい話しだったのかヨダレをたらしながら眠っていた。

「「「……」」」

銀時を除く全員は黙ったまま銀時を見る。

「何でこんな大事な話の時に寝てんのよ！」

「こんな大変な時に何寝てんだぁぁぁ！！」

バキッ×2

美琴と新八は立ち上がって銀時の方へと近づくと、ツッコミを入れながら頭を同時に殴る。

「い、痛ってェなオイ！何しやがんだ！？」

「寝てるあんたが悪いんでしょ！」

「こんな時に寝るなんてどういう神経してるですかアンタ！」

銀時は涙目になりながら殴られた所を手でさすり、美琴と新八に文句を言うが、美琴と新八に逆に叱られる。

「……」

固法は銀時を見て呆然とする。

「……固法先輩、お気になさらずに続きを…」

「あの天パにかまってたら日がくれるアル」

黒子と神楽は固法に話しを続けるように促す。

☆

固法はレベルアッパーが使用者の五感から脳に干渉することで脳波を一定のパターンに統一させ、並列演算ネットワークを構築して疑似的な演算装置としネットワークの一部とする装置であることを説明した。

これを使用することで演算の効率が向上するため使用者は一時的に演算能力が上がり、能力のレベルも上がるが他人の脳波を無理に当てはめているので負担が大きく、使用者は一定期間後に昏睡状態に陥る。

「……説明としてはこんなところかしら」

固法は説明を終えて、銀時達を見る。

「ＡＩＭ拡散力場…そして脳のネットワーク確かにそれならば……」

「莫大な情報を効率的に処理出来る…！」

黒子と美琴はレベルアッパーの仕組みを理解する。

「バンクにアクセスして一致している脳波を検索してみるわ」

固法パソコンの前まで行き、キーボードを操作しながらバンクにアクセスして一致する脳波を探す。

「「……」」

難しい話しだったために銀時は眠たそうな顔をしながら頭をこっくりこっくりと動かす

難しい話しを聞いた神楽は完全に寝てた。

「神楽はともかく…あんた…ちゃんと聞いてたわよね？」

神楽と銀時をジト目で見ながら尋ねる。

「え？ああ…めっちゃ聞いてた、高校の校歌を歌うくらいの気持ちで真面目に…」

美琴の言葉で我に帰った銀時は慌てながら聞いてたと言う。

「それ…真面目なの？」

美琴はジト目のまま銀時を見つめる。

「クラスに一人くらいいるよな、朝礼の校歌斉唱を真面目に歌ってるヤツ周りが歌わねえ中で特攻していくその度胸はすげぇよな、うん」

銀時は腕を組みながらうんうんと頷く。

「……（ダメだ、コイツと話してると真剣な雰囲気がなくなっちゃう……）ハァ…」

美琴は諦めた表情をしながらため息を吐く。
ちなみに神楽は今シロと新八によって起こされてる。
「見つけた！脳波パターン一致率９９％！」
固法がバンクから脳波パターンが一致する人物を見つけ出す。
固法の言葉を聞いた、銀時達は固法の後ろからパソコンの画面を覗く。
「こ…この人は……！」
「えっ！うそ！」
黒子と新八は画面に出てる人物の画像を見て驚愕の表情になる。
「木山春生！」
「あの脱ぎ女アル！」
美琴と神楽は画像の人物が木山春生であることを言いながら驚く。
「……初春の奴がやべぇ」
銀時は初春が木山の所に行ったことを思い出しながら言う。
「初春さんがどうしたの！？」
初春が木山の所へ行ったことを知らない固法は銀時の方を向きなが

ら尋ねる。

「さっき…その木山先生の所に行くって！」

銀時の隣にいた美琴が初春が木山の所に言ったことを告げる。

「なっ……！？」

固法が初春が木山の所に行ったことを聞き、驚愕の表情になる。

「……ダメです！電話にも出ませんわ！」

黒子は自分の携帯電話で初春に連絡しようとするが電話がつながらかった。

「アンチスキルに連絡！木山春生の身柄確保を！ただし人質がいる可能性あり！」

「分かりました！」

黒子は固法の指示に従い、アンチスキルに連絡する。

「……どうも、また面倒くせぇことになったらしいな」

「確かにヤバいよねこれは…」

銀時とシロはこの後、厄介なことが起きることを予感する。

☆

ＡＩＭ拡散力場研究所。
その研究所の、とある一室で、初春は驚愕していた。その手にはまとめられた大量の書類がある。
「『音楽を利用した脳への干渉』！？さっきの今で何故こんなモノを…他にも共感覚性に関する論文がたくさん……」
それは、先程、風紀委員の１７７支部で美琴と黒子と初春の三人で行き着いた答えと同じ内容のものであった。
「『Ａｎ　Ｉｎｖｏｌｕｎｔａｒｙ　Ｍｏｖｅｍｅｎｔ』？これは……」
それは、通称『ＡＩＭ拡散力場』と言われて、学園都市の学生なら無能力者から超能力者まで、全ての学生が無意識の内に発している特殊な力場フィールド。
初春が何か嫌な予感を感じ取ったその時…
「いけないな。他人の研究成果を盗み見しては……」
木山の声が聞こえ、初春が逃げだそうするが、肩を掴まれて逃げる事はできなくなっていた。

第十三訓　道路で暴れるのは止めましょう

同日、とある道路。

初春は木山の資料を見てしまう。その時、木山に捕まり、初春がジャッジメントに連絡させないように今は木山に手枷をつけられ木山の車の助手席に座らされた。

「……」

そして今、初春に連絡がとれないことに気づいている可能性を考えながら、アンチスキルに連絡される前に研究所を出て今、走っている木山の車の助手席に座っている初春は黙ったまま何も喋らない。

「すまないね…手枷など付けて車に乗せてしまって…まいったよ……私の部屋は普段誰も立ち入れないようになっているし来客もほとんどなかったからね」

木山は初春に手枷をつけ車に乗せたことを謝る。

「少々不用心だったかな。……ところで、以前から気になっていたんだが、その頭の花はなんだい？　君の能力に関係があるのかな？」

木山は初春の頭の花飾りについて尋ねる。

「お答えする義理はありません。そんな事より『レベルアッパー』って何なんですか？　どうしてこんな事をしたんですか？　眠った人達はどうなるんですか？」

木山の質問を断ると初春は木山を睨み付けながらレベルアッパーについて質問する。

「矢継ぎ早だな……」

木山はボソッと呟く。

「……まず、『レベルアッパー』だがあれは複数の人間の脳波を繋げる事で、高度な演算を可能とする物だ」

「繋げる……？」

木山はレベルアッパーについて初春に説明する。

初春は木山が言った繋げるという言葉に首を傾げる。

「どうしてこんな事を……か。……あるシュミレーションをするために『ツリーダイアグラム』の使用許可を申請したのだが、どう言う訳か断られてね、代わりになる能力者が必要なんだが……」

木山は目的を話す。

「そこで、能力者を？」

「ああ、一万人ほど集まった」

「！？」

初春が目的のために能力者を使用した木山に驚き、顔を険しくさせながら木山を怒りを込めて睨む。

「そんな怖い顔をしないでくれ」
木山はしれっとした顔で返す。
「シュミレーションが終われば全員解放するのだから。嘘だと思うかい？」
そう言うと、木山はポケットから何かを取り出して、初春に向けて手を差し出した。
「君に預けておくのも面白いかもしれないな」
「？」
初春は横目で木山が渡したものを見ながら、渡されたものが何なのか首を傾げる。
「レベルアッパーをアンインストールするワクチンソフトだ、後遺症はない。全て元に戻る」
木山は渡された物の名前を言う。
「信用できません！臨床実験が充分でない物を安全だなんて言われても何の保障も無いじゃないですか！」
「はは、手厳しいな」
こう言われるのを予想していたのか、木山は初春が言っても動じはしなかった。

「それに、一人暮らしの人やお風呂に入っていた人なんかはどうなるんですか！発見が遅れたら命にかかわりますよ！」

、初春がツッコむと同時に、運転技術はかなりあったのか、安定した運転をしていた木山が動揺したのか、車体が大きく揺れた。あまりに唐突な激しい揺れに初春は目を回して、頭がゆっくりと揺れた。

先程までの、態度はどこに行ったのやら木山は小さくなって言った。

「……まずいな。学園都市統括理事会に連絡して、全学生寮を見回りさせなければ」

木山の顔からは大量に汗が噴き出していた。どうやら考えていなかったようである。

「想定してなかったんですか！？」

初春はツッコミながら思った本当に大丈夫なのだろうかこの人、と思った。

☆

「アンチスキルから通信があったのですが、初春も木山も消息不明だそうです」

「ちっ…どうやら嫌な予感が当たりそうだな…」

黒子がアンチスキルから入った連絡を聞き現状を報告する。

銀魂は舌打ちしながら嫌な予感が的中したと思う。

「私も出るわ！」

美琴は初春の救出と木山を確保するため自分も出ると言う。

「一般人の御坂さんが出るのは問題だけど…レベル５のあなたの協力があれば…」

一般人である美琴を出すことに最初は渋る固法であったがレベル５の実力があれば早く事件が解決することができると考え出す。

「いけませんわお姉さま！ジャッジメントのお仕事に首を突っ込んでは！」

黒子は美琴を事件に巻き込まないために事件に首を突っ込んではいけないと注意する。

「ごめん黒子……嫌な予感がするの、今回はどうしても行くわ」

心配してくれてる黒子に申し訳なさそうに謝ると同時に嫌な予感がすると言う理由をつけながら自分も行くと言う。

「し、しかし……」

黒子は美琴が事件現場に行かせることにまだ納得がいってなかった。

「……わーったよ、なら俺がついてってやるよ保護者がいりゃまあ何とかなんだろ…多分」

銀時は黒子を納得させるために自分も美琴についていくと言う。

「そ、そういう問題では……」

銀時の実力をわかっている黒子だがやはり一般人を行かせることにはまだ納得していなかった。

「それに…俺は教師としてテメーにだけ無理させるわけにゃ行かねーんだよ」

「…たまには私に頼りなさい、力になれるんだから」

「……お姉さま」

銀時と美琴の言葉に黒子はついに折れた。

「…さーて、じゃあ行くとするか」

「僕も行くよ銀ちゃん」

「銀ちゃんとビリビリだけじゃ心配だから私も行くネ」

「ケガしても知らねーぞ」

銀時が行こうとする神楽とシロに忠告する。

「じゃあ僕も…」

「じゃあ行くぞテメェら」
大人しく投降しろ」

『『『はーい』』』

新八も行こうと名乗り出ようとするが、銀時達は新八を無視し部屋を出ていく。

「え？ちょっとなんで僕無視するんですか！？」

無視された新八は銀時達の後を追いながらツッコむ。

「だ…大丈夫かしら…」

固法は銀時達が部屋を行った後、心配そうな表情をしながら思ったことを口にする。まあ、確かに美琴はともかく銀時達が一緒じゃねぇ…

☆

とある高速道路。

「もう踏みこまれたのか」

木山は、車内にあるおそらく『レベルアッパー』のデータが保存されている機材と連動して動いている車内のモニターの画面を見て言った。

「君との交信が途絶えてからだとすれば早過ぎる。別ルートで私に

まで辿り着いたな」

ひとりでに喋り始める木山の言葉に初春は首を傾げる。

「所定の手続きを踏まずに機材を起動させると、セキリュティが作動するようにプログラムしてある。これで『レベルアッパー』に関するデータは全て失われてしまった。もはや『レベルアッパー』の使用者を起こせるのは君のそれだけだ」

木山は、初春が大事そうに持っている治療用プログラムを横目で見る。データが失われた事も予想通りだったといった様子の木山に、初春は疑問を持った。

何故、そんな大事な物を自分に渡したのだろうか、と。

「大切にしたまえ」

しばらく進むと、十数人のアンチスキルが道を塞いでいた。

銃器を装備しているが、使用されているのは実弾では無くゴム弾だろう、と木山は推測する。

ある程度の距離を置て車を停止させると、ハンドルに体重を乗せるように体を前に傾ける。そしてメンドクサそうに言った。

「上から命令があった時だけ動きの早い奴らだな」

『『レベルアッパー』配布の被疑者として勾留する。直ちに降車するじゃん』

初春は、予想していたより早く事件が終わってしまいそうなので、少し意外そうな顔で。

「どうするんです？　年貢の納め時みたいですよ」

だが、木山の顔には一切の焦りも恐怖もなかった。むしろ何か、この状況を打破する策でもあるかのような確信めいた顔で、小さく笑って。

「『レベルアッパー』は人間の脳を使った演算機器を作るためのプログラムだ。……だが、同時に使用者に面白い副産物を齎もたらす物でもあるのだよ」

何かしらのアクションを起こすと思ったのだが、木山は車を降りるとあっさりと両手を上げた。
しばらくして、目が不自然に赤く染まった。

「確保！」

同時に、警戒しているアンチスキルの一人の女性が指示を出した。その指示を聞いてか否か、何故かアンチスキルの内の一人の銃の引き金が引かれた。

短い音が鳴った。それは間違いなく銃声だった。
だが、銃弾をもらったのは木山ではない、同じ、アンチスキルの脚に直撃した。撃たれたアンチスキルは痛みで地面に倒れこみ、周囲のアンチスキルも何が起きたのかわからずに驚いている。だが、銃を撃った本人も驚いており、仲間に疑われるながら、必死に誤解を解いている。
そこで、初春とアンチスキルの数人が気付いた。木山が右腕を前に突き出している。だが、注目すべきはそこではない。突き出したその右手に、暴風が渦巻いている。

そしてその場に居た誰かが、木山のその姿を見てある言葉が思い浮かんだ。

「能力者！！？」

アンチスキル、初春飾利、その場に居た全員が、学生でも無い木山が能力を使用する姿に息を呑んだ。それと同時に……

ドオンッ！！　　爆音が鳴った。

☆

「着いたよ！」

「すごい…一瞬で来ちゃった」

シロが中距離空間移動が可能の亜神術『スペース』の三回詠唱を使い銀時達アンチスキルと木山がいる所の近くへと運んだ。

なぜシロが亜神術で運んだのかというと、シロが黒子に余計な力を使わせないためである。

「わたくしよりも速い…わたくしより運べる量が多い…なんであんな白髪のガキんちょにそんなことが…」

「何で黒子さん、あんなにへこんでるの」

なぜか体育座りして地面にのの字を書きながらへこんでいた。

シロはなぜ黒子がへこんでるのかわからず首を傾げていた。

「で……このめちゃくちゃな状況はどうなってんだ？」

銀時はアンチスキルと木山がいる場所を見ながら答える。

「これは！」

「復活はやっ！」

立ち直った黒子は銀時が見た方向を光景を見て驚く。新八は復活がはやい黒子にツッコむ。

「アンチスキルが…全滅……？」

美琴の口にした通り、銀時達が見た光景はアンチスキルが全滅されている光景だった。

護送車は横に倒さたり破壊されており、アンチスキルは傷つき倒れていた。

「おい、シロ初春は無事か？」

銀時はシロに初春の安否を尋ねる。

「待ってて…『サーチ』！」

亜神術を唱えるとシロの目が緑色に光り、初春を探す。シロの視界に青い車に『ここ』という文字が入る。

「あの車の中か…『チェック』！」

シロの目が青く光り初春の状態を調べるとシロの視界に『気絶中だが命に別状なし』という言葉が出る。

「大丈夫、気絶しているけど命に別状は無いよ」
シロは初春の状態を銀時に告げる。
「そうか…」
「よかった…」
銀時と美琴は安否を知り、ほっとする。
続いて新八たちもほっとする。
「しかし亜神術って本当に便利ですのね…」
黒子は改めてシロの亜神術が便利であることを思うのであった。
「……君達も来たのか」
傷が少ない青い車の数メートル先にある砂ぼこりが舞ってる場所から木山の声が聞こえると砂ぼこりから木山が姿を表した。
「「「！」」」
「あ、アンタ…！」
新八、神楽、黒子、美琴は無傷でいる木山に驚くもすぐに警戒する。
「…やっぱ隈が出来てる奴は総じて大物だなオイ」
『まだ言ってるんですか旦那さん？』

銀時の言葉にツッコむウォッチ。

「アンタ…これ以上は好き勝手にやらせないわよ！」

「確かにこれはほっとけないね…」

美琴とシロは木山がこれ以上の犯行をさせないために木山を止めようとする。

「…あれだけのアンチスキルにも止められなかった私と戦うつもりなのか？」

木山は武装されたアンチスキルを倒した自分と戦うつもりなのかと尋ねる。

「……（あのアンチスキルを退けるのは生身では到底不可能……つまり…木山は高位の能力者である可能性が高い…ですが…！）」

黒子は木山の実力を高いという推測を立てたあと表情を険しくさせる。

「止まってくださいって頼んでもどうせ止まらねーだろ？なら……」

「戦るしかないじゃない！」

「こっちも同じく」

銀時、美琴、シロに続き新八達も戦闘体勢にはいる。

「フッ…君たちは面白いな……出来れば戦いたくないんだが…やむを得ないな」

木山は短く笑ったあと、向かってくる銀時達に面白いという評価を送ったり戦いたくないと言ったりするが最終的にやむを得ないと言ったあと、銀時達と戦うことを決める。

第十四訓　友達は投げるものではな～い！

「行くわよ…！」

「手加減は出来ませんわね……」

美琴は青白い電気を発し、黒子は太ももに巻きつけてあるホルダーに仕込んである白い鉄矢を手に触れたと同時にテレポートで黒子の前に移動させ黒子は移動させた計８本の鉄矢を４本ずつ両手で掴む。

「さて…レベル５のレールガンにレベル４のテレポーター、そして…」

木山が美琴と黒子のやった行動を見て、能力名を言い当て次に銀時達の方を見る。

「ん？」

銀時達は能力者でもない自分達がどうして木山がこっちを向いたのか首を傾げる。

「……レベル５の天然パーマとレベル５のメガネとレベル５の釘宮ボイスと…おまけか…」

木山は冷静な表情を崩さずに銀時達にとんでもない言葉をかける。

「「「ちょっと待てぇぇぇぇぇぇぇぇぃ！！！」」」

「ガーン！お…おまけ…」

銀時、新八、神楽は木山の言葉に怒り、シロはおまけ扱いされショックを受ける。

「何で俺達だけそんな感じ！？もっと何かあんだろォォォ！？」

銀時は木山に向かって額に青筋を浮かばせながら叫ぶ。

「てかめっちゃカッコ悪いじゃん！！めっちゃ恥ずかしいんだけど！？」

銀時は木山の言った言葉の感想を言う。

「つーかレベル５のメガネって何ですか！嫌なんですけど！！」

新八も顔に青筋を浮かばせながら木山に向かって叫ぶ。

「私もいやネ！しかも私だけ声優ネタだったネ」

神楽も木山に向かって叫ぶと同時に自分だけが声優ネタであることをツッコむ。

「いや…その人物をそのまま表現する言葉を用いるべきだと思ってね」

冷静な表情を保ちつつ木山は銀時達に言った理由を告げる。ちなみに木山に悪気はありません。

「何で天パ＝俺みたいになってんだァァ！しかもレベル５ってお前ええええ！」

銀時は木山に向かって自分が天パを自分に例えることを訴える。

「しかも僕＝メガネって酷いじゃないですか！！」

新八も木山に向かって訴える。

「何当たり前のこと言ってるアルか新八！私なんて私＝釘宮ボイスアルよ！それはつまり釘宮ボイス＝釘宮キャラアルよ！」

神楽は新八に叫んだあと、木山に訴える。

「当たり前って何だよ神楽ちゃん！当たり前って！」

新八は神楽の言葉に聞き捨てないセリフが入っていたため神楽に向かって叫ぶ。

「そのままの意味だぞ新八（メガネ）」

銀時は新八に言う。

「オイィィィィィィィ！！新八と書いてメガネってなんだぁぁぁぁぁぁぁ！！」

銀時の言った言葉に怒りを込めてツッコむ。

「僕はおまけ…僕はおまけ…ふふっ…しょせん僕はオリジナルのキャラか…」

シロは相変わらず地面にのの字を書きながらいじけていた。

「フフ…キミ達は面白いな」
こんな状況で口喧嘩している銀時達を見て短く笑う木山。
「……」
黒子は銀時達の口喧嘩を見て頭をおさえる。
「遊んでんじゃないわよ！」
美琴は銀時達を叱りながら前方にいる木山に電撃の槍を放つ。
「隙アリですわ！」
黒子もテレポートを使い鉄矢を木山に向けて飛ばす。
しかし…
カキンッ！！
美琴と黒子の攻撃が木山に当たる直前のところで突如現れた防壁によってはじかれた。
「なっ…！」
「うそ…！」
美琴と黒子は自分たちの攻撃がはじかれたことに驚く。

「せっかちだな……会話をする余裕くらい持つべきだと思うが…」
木山は余裕を崩さず、美琴と黒子の行動にツッコむ。
（私の電撃…それに黒子の鉄矢も……防壁で弾かれた？）
（やはり…一筋縄では行きませんわね）
美琴と黒子は木山がただ者でないことを改めて知る。
「次はこちらからいかせて貰うよ」
木山は手のひらから光の玉が出現する。そして光の玉を美琴達に向かって投げつける。
黒子は美琴と一緒にテレポートを使い木山が放った光の玉を回避して直撃を避け、光の玉は道路に当たり爆発した。美琴と黒子は木山を見ながら攻撃が当たらない悔しさで歯を噛み締める。
「どうした？もう終わりなのか？それとも…次は君達か？」
木山は美琴と黒子に尋ねると次は銀時とシロがいる場所の方を向く。
「テメーみたいな奴とやり合うのは好きじゃねーが…そうも言えねぇからな」
「確かにこの人を止めなくちゃいけないよね…援護するよ銀ちゃん！」
銀時は木刀を構え、シロは戦闘体勢を構えながら援護をすると銀時に言う。

「ああ…行くぜ！」

「はい！『フライ』！」

銀時は木山に向かって走り出し、シロは亜神術『フライ』で飛び上がる。

（白髪のあの子は空中からの攻撃か悪くない…ただ天然パーマは真正面から走ってくるか…芸がないな……）

木山は手のひらから炎の玉を発生させながら、シロと銀時の行動を見てそれぞれの行動を評価をしたあと、真っ正面から突っ込んでくる銀時を最初に攻撃をしようと考えた後、攻撃を実行するため火の玉を投げる。

「オイオイ炎とか……全然遠慮ねェなオイ」

銀時は木山の手から発生し投げられた火の玉を見ながら、若干ひきつった表情を浮かべる。

「君の髪なら燃えても大して変わらないだろうと考慮して…」

木山は火の玉で攻撃する理由を銀時に真顔で言う。

「オイィィィ！俺の頭が焼け野原って言ってんのかテメーはァァァ！」

銀時は木山の言葉に怒り、木山に向かって額に青筋を浮かべながら怒鳴る

「「「え？違う（のかい）（の）（んですの）？」」」

木山と後方にいる美琴と黒子が首を傾げる。

「オイィィィ！てか何でお前らも俺の頭を焼け野原と思ってたんかいィィィ！！」

銀時は美琴達の方を向かずにツッコむ。

（って、ふざけてる場合じゃねぇな…何とかしてあの炎かわさねぇとな！）

銀時は目の前の炎に集中を戻し、常人以上の身体能力を使い炎を避ける。

「！今のを回避したとは…君の身体能力は非常に優れているらしい…なら連発ならどうだ！」

銀時の身体能力に一瞬驚く木山だがすぐに平静を取り戻し、迫ってくる銀時の身体能力を高く評価したあと、手を振り払うと同時に五個ある風の刃を銀時に向けて放つ。

「ちっ！」

銀時は風の刃を高く跳躍してかわすと空中で待機していたシロの手に捕まる。シロは銀時を木山の後方数メートル先に投げる、投げられた銀時はうまく着地してすぐに木山のいる方向に向いた。

「まったく…キミの身体能力にはいつも驚かされるよ…」
木山はそう言いながら数十個の光の玉を銀時に向かって放つ。
「それは…どうも！」
銀時は光の玉を避けながら木山に近づき、木山に木刀を横薙ぎに振るう。だが…
ガキン！
「だが…やはり私までは届かないらしいね」
木山の言う通り、銀時の攻撃は木山に届くことはなかった。
「（ダメか…コイツは簡単にぶち破れるような防壁じゃねぇな）…さすがはＡＴフィールドだなオイ」
銀時は木山から後ろに跳びながら離れると、普通の攻撃では木山の防壁を壊すことができないと感づく。
（ＡＴフィールド…？）
銀時が言った言葉に眉をひそめる木山。
「だがよォ…俺に気をとられすぎだぜ」
（何を言って…！？さっきのメガネの子とチャイナの娘（こ）の姿が無い！？……まさか！？）
木山は銀時が言った言葉を不審に思う、その直後銀時の言葉の意味

に気づき焦りながら後ろを振り向き、新八と神楽がいた方を見るが新八と神楽の姿は無かった。新八と神楽がどこにいったのか考えると予測がついたのか木山は愛車の方を見た。そこには新八と神楽が気絶している初春を車の中から助け出し、新八と初春を担いでいる神楽が美琴のところへ走っていく姿を目撃した。

「まさか…私が出し抜かれるとはね…すごいコンビネーションだな」

木山は銀時とシロが囮となり、その間に人質である初春を救出したことに悔しがることなく逆に褒める。

「それだけだと思うか？」

「何？」

「『ストーン』＋『ホールド』！」

空中にいるシロが亜神術を唱えると、木山の足元の道路が液状のように形に変わり、木山の足に道路が絡みつく。

「しまった！」

木山が気づくもすでに遅く、絡まれた道路は固まり木山の足をガッチリととらえ動きを止めた。

「残念だったな」

銀時は腹が立つような嫌らしい笑みをニヤリと浮かべる。

☆

「なっ…能力を全て避けるなんて！？」

美琴は能力を使って強化しついないのにすごく高い銀時の身体能力を見て驚きを隠せなかった。

「確かに…普通は能力者一人につき一つしか能力が使えないのに、複数の能力を使える木山もそうですが…その木山の攻撃を全て避けた銀時先生も凄いですわね…」

黒子は美琴ほど驚きはしないものの複数の能力を使う木山と人間離れした身体能力を持つ銀時を比較し冷静に解析する。

「あっ！」

「どうしたんですのお姉さま！？」

何かに気づいたのか声を上げた美琴に黒子は大声を上げながら尋ねる。

「黒子に言われるまで木山が複数の能力使ってたの気づかなかったわ！」

美琴は真剣な顔でとんでもないことを告げる。

「お姉さま…（なぜでしょうお姉さまが銀時先生達と同じ雰囲気になってる気が…）」

黒子は涙を流しながら銀時達と同じ雰囲気になってることを悟った

のであった。

「でもそれが本当なら木山は『多重能力者(デュアルスキル)』ってことになるわよ！」

「御坂さん！白井さん！」

「美琴〜！黒子〜！」

美琴と黒子の名前を呼びながら新八と神楽が初春を連れてきた。

「「初春(さん)！！」」

美琴と黒子は新八と神楽に駆け寄る…その時。

ズドォォォォォォン！！

「「「「！！？」」」」

突然起きた轟音に気づき、四人は轟音がなったであろう方向を見る。そこには、銀時と木山がいた場所の高速道路が数メートル範囲で壊され崩れ落ちていた。

「大変だよ新八！木山さんが周りの道路を壊して銀ちゃんと一緒に落ちた！」

シロが慌てながら新八達に走りながら近づき、どうしてこんなことが起こったのかを説明する。

「そんな！」

「銀ちゃん！」

「先生！」

「あのバカ！」

それを聞くと地面に初春を寝かせ新八、神楽、黒子、美琴は銀時と木山がいた場所へと走って向かう。

「私と黒子とシロはこの下に行く！神楽と志村さんは待機して！」

「わかりました！」

「頼んだアルよビリビリ！」

美琴の指示に了承する新八と神楽。

「行くわよ黒子、シロ！」

「はいお姉さま！」

「わかった！」

美琴の指示を聞き入れる黒子とシロ。

黒子は美琴と一緒にテレポートで移動し、シロは穴に入る。

☆

美琴達がついた先には壊された道路が瓦礫の山となっていた。

「キミ達か…」

声のした方を向くとそこには無傷の木山がたっていた。おそらく防壁で瓦礫を防いだのであろう。「ったく…足場を崩しやがって」

瓦礫の中から頭から血を流してる以外目立った外傷が無い銀時が出てきた。

美琴達（シロを除く）は銀時を見て驚いた様子を見せる。

「あれ？お前らも来てたの？っていうか何驚いてんの」

「普通驚くわよ！」

「そうですわ！あんな高いところから瓦礫と一緒に落ちてきて、瓦礫の山に生き埋めにされて、頭から流血してる以外目立った外傷が無ければ誰だって驚きますわ！」

「私はキミを人間と認識していいのかわからなくなってきた…もしかしてキミの天然パーマと何かしら関係があるのかい？」

「最後の人ヒドクね！？」

美琴と黒子と木山は銀時に向かって各々が思ってることを言う。

銀時は最後に言った木山にツッコむ。

「銀ちゃん…今それどころじゃ無いでしょ…」

シロはジト目で銀時を見る。

「はっ！そうだったな…じゃあ、第2ラウンドといこうか」

銀時は今おかれている状況を理解すると、木刀を構え直す。

「（電撃は効かない…鉄矢と木刀での物理攻撃も無効化か…なら！）これなら…どうかしら！」

美琴は地面に手を向け電気を地面に当てる。すると、地面から黒い砂状のものが美琴の手に集まり、剣の形になる。

「砂鉄…？……なるほど、磁力で地中の砂鉄を操っているのか…」

木山は美琴がしたことを理解する。

「そう…超速振動してるこの砂鉄に触れたら…ただじゃ済まないんだから！」！

「工夫は認めるが…それだけではダメだな」

木山は美琴の砂鉄の剣を認めるが、それではダメだと言う。木山の言う通り、美琴の砂鉄の剣は木山の防壁によって防がれた。

「なっ…！」

（そんな…お姉様の攻撃がことごとく…）

美琴と黒子は砂鉄の剣でさえ防壁で弾かれたことに驚きを隠せなかった。

「次はこちらから行かせてもらうよ」

木山が手を動かすと美琴が宙に浮く。

「！？（念動力…しまった！）」

美琴が木山の使った能力を念動力であることを知り、危険を感じるが…遅かった。木山が手を右斜め下へと薙ぎ払うと美琴は地面に叩きつけられた。

「ぐっ！」

美琴は叩きつけられた痛みで声を漏らす。

「お姉さま！」

美琴が叩きつけられた姿を見て黒子は悲痛な叫び声を上げる。

「…どうした？レベル５第三位の力はこの程度なのか？」

美琴の実力がこの程度かと木山が尋ねる。

「うるさいわね…」

美琴は忌々しそうに木山をにらみつけるながら言う。

「やべぇな…ジリ貧になっちまったら俺たちに勝ちはねーぞ」

「そんなこと分かってるわよ……けど、あの防壁を何とかしないとね」

木刀を構える銀時と立ち上がり青白い電気を体に走らせる。

「あの防壁を無効化できれば…ってあれ？何で僕を見てんの？」

シロが無効化できればと言った後、美琴と銀時がシロの方を見る。

シロは何で見るのと言いながら、銀時と美琴を交互にらみ見ながら尋ねる。

「「よいしょっと！！」」

銀時はシロの手、美琴はシロの足を持ち上げる。

「えっ！？えっ！？何で持ち上げんの二人とも？」

シロはいきなりの行動と手も足も出せない状況に慌てながら尋ねる。

「いや…だってアンタ『嫌われ者（ディスライカー）』っていう無効化能力あるんでしょ？だったらアンタを投げれば防壁を無効化できるから攻撃できるはずよ？」

「いいの？常盤台のエースがこんなんでいいの？」

シロは美琴の言動にツッコむ。

「シロお前なら大丈夫だ。だから逝ってこい！」

銀時はシロに大丈夫だと励ます。

「字が違うような気がするけど僕の気のせい？」

銀時が言ったことに誤字があったことをツッコむ。

「安心してくださいシロさん」

銀時の横にいた黒子は腕を組みながらシロに安心するように促す。

「黒子さん！？」

シロは希望を持つが…

「骨ぐらいは拾って差し上げますの」

すぐに希望は打ち砕かれた。

「僕の味方はどこにいるの？」

シロは涙目になりながら尋ねる。えっ誰に尋ねてるかって…それはあなたの想像におまかせします。

「「はーい…3…2…1」」

美琴と銀時はシロをブランコのように揺らしながら、カウントダウンらしきものを数える。

「え…ちょっと…止め…」

「「いっせーの…うりゃあああ！！」」

シロの制止を聞かずに銀時と美琴はシロを木山に向かって力一杯投げ飛ばす。

「この人でなしィィィィィ！！！」

シロは涙を流しながら叫ぶ。

「攻撃が効かないことはキミ達がよく…グハッ！」

木山が美琴と銀時を防ぐための防壁を張りながら攻撃が効かないことを忠告するが、防壁が消されシロの頭が木山の顔に当たる。

「くっ…なんで防壁が消された！」

木山は鼻血をたらしながら防壁が消されたことを疑問に思う。

（今ですの！）

黒子は木山が怯んでる隙に銀時をテレポートでどこかに飛ばす。

（なっ…彼が消え…！テレポート！？…まさか…この子は防壁を消すための囮…本当の目的はあのテレポーターがその隙に彼を私の所まで飛ばし…！）

「しっ、しまっ…」

木山は銀時達の行動を推測するが時すでに遅し…

「うおりゃ！！」

バキッ！

木山の真上に現れた銀時は持ってた木刀を振るい木山の頭に当てる。

「うぐっ！」

木山は頭に走った激痛と脳を揺らされたことに声を漏らす。

（まだだ！ここで一気に畳み掛けてケリ着けるしかねェ！）

銀時は着地した後、再び木刀を構え直す。

「くっ…隙をつかれたか……」

木山は頭を抑えながら、隙をつかれたことを理解する。

「ウオオオオッ！」

銀時は木山に木刀の一撃をあたえようと、木刀を大きく振るおうとする。

「だがこれだけでは……」

木山はこれだけは譲れないと言いたそうな強い意思がこもった目で銀時を見る。

（あの女の目…あの時のなのはやフェイトと同じ目をしてやがる…）

（攻撃が鈍った？）

銀時と木山はそれぞれの姿を見ながら心の中で思う。
その時…
ガシッ！
「！？」
木山を後ろから誰かが羽交い締めし捕まえる。
「捕まえたわ…密着しての電撃なら…防ぎようがないでしょ！」
美琴だった、美琴は電撃を出すことを木山に宣言する。
「くっ！？」
木山は美琴に捕まり悔しそうな表情をする。
「いやちょっと待て、この距離で電撃だしたら俺も感電…」
『シロさまを投げたのです報いは受けてください旦那さん？』
「えっちょっと！」
バチバチバチバチッ！
銀時の制止を聞かずに美琴は放電をする。
「うあああああっ！！」！
「何で俺までェェェェェ！？」

木山と銀時は美琴の電撃に苦しみ叫び声を上げた。

「さすがに木山もお姉さまの電撃には…ん？」

黒子は美琴の電撃に木山が耐えることが出来ないことを悟ると、黒子は自分の足に白い帯見たいなものが巻き付いことに気づく。巻き付いた帯の先を見ると、その先には帯を握りしめたシロが立っていた。

「よくも投げたな！道連れだぁぁぁぁ！」

シロがファイバーで出した、布だった。しかも電気を通し安い素材で作りました。

「えっ！？ちょっと…いやぁぁぁ！！」

シロの浴びた電撃が帯を通し黒子も美琴の電撃の餌食になりました。

第十五訓　子供は未来を担う大切な存在

美琴は木山にダメージを与えた放電を終える。
銀時は美琴の電撃を受けても木刀を杖代わりにしながら立っていた。
黒子は憧れの美琴の電撃を受けて幸せそうな顔をしながら倒れていた。
シロは無効化能力があるためダメージと外傷は無かった。

「うっ……」

木山は力無く、項垂れる。

「はぁ…はぁ……これなら…いくらアンタでももう……」

美琴は疲れた表情で息を切らしながら力無く項垂れてる木山に話しかける。

『センセー！』

突如、美琴の頭の中から子供の声が聞こえてきた。

「……？」

美琴は聞こえてきた声に首を傾げる。

（え？何…今の声……？）
（誰の声？）

銀時は若干怖がりながら、シロは不思議そうな顔をする。

『ねえセンセー！あのね……』

次に美琴の頭から子供がいる映像が映しだされる。

（これって…まさか電撃を通じて木山春生の記憶が……？）

美琴は自分の能力を通じて木山の記憶を自分も見ているのではないかと推測する。

（う～ん…これはお姉さまの能力を通じて…）

（能力を通じて映しだされた木山さんの記憶…）

（これって…まさか幽霊……いや、ない！ないないない！絶対幻聴だ…幻覚だ…）

美琴と同じ推測をする黒子とシロと幽霊と思い込み幻聴と言いながら現実逃避する銀時。

『木山センセー！』

（やっぱりそうだ…記憶が私の側に流れ込んできてる…！）

（き…聞こえねえ聞こえねえ！俺は何も聞こえてないからね！）

銀時と美琴とシロに流れてきたのは木山が子どもたちの教師をしていたころ記憶であった。

実験を成功させるために詳細な成長データを取るために。
あくまで、実験をする者と、実験の道具になる者、ただ、それだけの関係だった。

『厄介な事になった。だが、とにかくこの実験を成功させるまでの辛抱だ』

流れ込んでくる、木山の過去。。
『子供は嫌いだ』

子供たちと過す時間。

木山にとっては実験を成功させる為の、統括理事会肝入りの実験に参加するための、くだらない時間。

『騒がしいし、デリカシーがないし、失礼だし、悪戯するし、論理的じゃないし、ならならしいし、すぐに懐いてくるし……本当にいい迷惑だ。』

誕生日を祝ってもらった。
夏が過ぎた。子供たちにいたずらされた。秋が過ぎた。雪合戦をしたり、似顔絵を描いてもらったりもした。冬が過ぎた。
そして…

『ＡＩＭ拡散力場制御実験。長い時間をかけて、何度も何度も計算を繰り返して準備をしてきた。何も問題はない。これで先生ゴッコもおしまいだ』

被験者である置き去り（チャイルドエラー）の女の子に、怖くない

か？　と聞いた。
女の子は笑顔で言った。
『センセーの事信じてるもん。怖くないよ』
ようやく子供達から解放された。
『これでおしまい……』
結果は失敗。確実に成功するはずの実験内容だった。例え失敗したとしても、実験をする者と、実験の道具になる者、そこに感情が入る余地などなかったはずだ。ただそれだけの関係だった……はずなのに。
木山の記憶があまりにも衝撃的だったのか、腕の力を緩めてしまい、木山は地面にうつ伏せに倒れる。
「こんな…こんなことが……？」
美琴は木山の記憶を見て、驚きを隠せなかった。
「見られてしまったか…君たちには知られたくなかったんだが……」
喋れるくらい回復した木山は頭を抑え銀時達を見ながら記憶は見られたくなかったことを銀時達に話す。
「今の…あんたの記憶よね？どうしてこんな人体実験が…」
「それは私が一番知りたいことだよ…何故こんなことに…あの子達がなぜ『暴走能力用の法則解析誘爆実験』のモルモットにされなけ

ればならないんだ！」

暴走能力用の法則解析誘爆実験…それはすなわち能力者のＡＩＭ拡散力場を刺激して暴走の条件を知るための実験である。

木山は子供たちがそんな実験のモルモットにされたことを口に出しながら怒りを表す。

「じゃあ…あの子ども達を救うためにこんな事件を起こしたってこと……？」

「……」

美琴は尋ねるが木山は黙ったままこちらを見つめていた。

「でも…他にももっとやり方があったはずじゃ……」

美琴は木山に他にも道があるのではないかと尋ねるが…

「君に…君に何が分かる！！あの子たちの回復手段を探るため、あの事故の原因を究明するシュミレーションを行うためにツリーダイヤグラムの使用の申請を二十三回もやった…だがダメだった…統括理事会が裏で手を引いているんだ！」

木山は声を荒らげながらこれまで試した方法を美琴たちに告げる。

「でも、それじゃアンタのやってる事も同じじゃない…！」

学園都市がそのような実験をしていたことの驚きをいまだに隠せずにいながら、美琴は木山がやってることが子供達をモルモットにし

た奴らと同じと言う。

「この方法しか…この方法しか私には残されていなかった…！私はあの悲劇を二度と繰り返さないためにあの子達を助るために…何を犠牲にしても…学園都市全てを敵に回しても…私は…私はあの子たちを……！」

木山は立ち上がるのもやっとの体を立たせながら美琴達に目的を実行した本心を告げた。

「……（さっき聞こえてた声も…全部が過去にマジで起こったことだってのか……）」

（あっ旦那さん今気づいたんですか…）

（銀ちゃんやっと気づいたよ…）

銀時が木山の過去の映像であることを今気づいたことに呆れる、ウォッチとシロ。

「……嫌いじゃねーよ、テメーみたいな奴は」

「「「？」」」

銀時が急に言い出したことに美琴、黒子、木山は疑問に思う。

「周り全部を敵にしてでも大切なモンを守ろうとするなんざ…普通は出来ねぇ」

木山が自分を犠牲にしてまで子供を救う行動を普通なら出来ないと評価する。

「まさかあんた…この人が正しいって言うつもりなの！？」

美琴は銀時の言葉が木山が正しい行動をしたと言ったふうに聞こえたのか、声を荒らげながら銀時に尋ねる。

「いや、俺ぁどっちが正しいだの正義だの言うつもりはねーよ……ただな…そいつらが目ぇ覚ました時…テメーがいてやれねーでどうすんだ」

銀時はどっちが正しいとか正義などとやかく言うつもりが無いことを美琴に告げた後、木山に残された子供達はどうするんだと尋ねる。

「確かに…全てが終われば私の身は拘束されるだろう……」

木山は静かに目を瞑りながら自分が拘束されることは承知の上であることを銀時達に示す。

「だが…それでも私はあの子達に生きててほしいんだ…！キミには…分からないだろうな」

木山は声を荒らげながら銀時に向かって自分を犠牲にしてでも子供達には生きて欲しいと叫ぶ。そして銀時には理解できないことだと考えた木山は銀時に向かって吐き捨てるように言う。

「……」

銀時は思った、この木山春生という人間は自分と同じであることを、

銀時も木山と同じように仲間のためなら無茶をしてでも権力者だろうが、宇宙海賊だろうが、敵に回すことを厭わない人物だからである。

「…分からなくはねぇよ……俺がテメーだったら同じようなこと考えてたかもしれねーな」

「「！！？」」

銀時の言葉に驚く美琴と黒子、シロとウォッチはこの言葉を予想していたのは驚いていなかった。

「君に私の気持ちが分かるとでも言うつもりなのか…？」

木山は銀時を見ながら尋ねる。

「んなこと言わねぇよ…俺はテメーじゃねェんだからな……テメー自身を理解できんのはテメーだけだ…俺がどうこう言えることじゃねぇけどな…自分らのためにお前が捕まったって知ったら…そいつらはどう思う…」

銀時は頭をかきながら、正論を言う。正論を言い終えると、銀時は木山に子供達が木山が捕まったと知った時にどう思うのかと尋ねる。

「……」

木山は子供達がどう思うのか知ってはいるが何も答えられなかった。

「…皮肉な話じゃねぇか、助けたつもりのガキ達に泣かれちまうなんざよ」

銀時は子供達を木山が捕まることにより、子供達が泣くことになることを木山に指摘する。

「だが…だが私のせいであの子達は…私にあの子達の隣にいる権利なんて……」

木山は顔を俯かせ、拳を握りしめる。

「権利ならあるだろ……」

銀時は木山の言葉を遮る。

「？」

銀時の言葉を聞き、木山は頭を上げる。

「そいつらが生きたい世界ってのは…自由に笑って泣いてダチと喧嘩して…そんなガキらしい毎日を…『テメーと一緒に』過ごせる世界なんじゃねーのか？」

銀時は子供達がどのようなことを望んでいるのか自分なりの推測を立てながら木山に尋ねる。

「私…と？」

木山は子供達がなぜ原因を作った自分と一緒に過ごしたいのか疑問に思う。

「さっきテメーの記憶を覗き見しちまったが……テメーが側にいる

だけで…みんな笑っていられたじゃねーか」

「僕も木山さんの記憶を見たけど確かに銀ちゃんの言う通り、木山さんと一緒にいる時の笑ってる子供達はとても幸せそうに見えたよ」

銀時とシロは記憶に出てきた木山と一緒にいた子供達がどのように見えたのかを木山に話す。

「……」

木山はまだ子供達に会っていいのかと悩んでいた。

「木山さんがいなくちゃ、あの子達きっと泣きますよ。だから、隣に立つ権利が無いとか言わないでよ…」

「もうテメーはあいつらにとっちゃ…いなくちゃならねぇ大事な存在なんだよ」

銀時達は子供達にとっつ木山はいなくてはならない存在であることを指摘する。

「……」

「銀時先生…シロさん…」

美琴は黙って銀時とシロを見て、黒子は銀時とシロの名前を呟く。

「……君は本当に不思議な男と少年だな」

木山は薄く笑いながら銀時とシロに思ったことを言う。

「不思議でも何でもねぇよ、俺達は女好きなただの遊び人と……」

「ただのあ…白髪の少年だよ（危なかった～今、亜神って言いそうになったよ）」

銀時はメンド臭そうな顔をしながら頭をかき、シロは指で頭をかきながら木山に言う。

「…君にもう少し早く会っていたら、私は…違うやり方も出来たかもしれないな」

木山は銀時達に会ってたら違う可能性を見つけていたかもしれないと考え出す。

「遅くなんかねぇさ…テメーに出来ることはまだ残ってんだろ？役に立てるかは分からねーが…俺たちも協力してやるさ、なあテメーら？」

銀時はシロ、美琴、黒子の順で見ながら尋ねる。

「僕にできることならばやるよ」

「そんなの…当たり前じゃない…！」

「…私も喜んでお手伝いを」

銀時の質問にシロ達は木山に協力することを約束する。

「…ありがとう」

木山は銀時達が協力してくれることに感激しながら感謝する。

第十六訓　背筋を伸ばして！

銀時達が木山を止めた頃、銀時達から数メートル離れた場所に遠くにいる銀時を見ている一人の男が立っていた。

「ふむ…そろそろ…だな…暴れろ…」

男が呟く。何に呟いたのか、どういう意味で呟いたのかは謎である。

☆

「ぐっ！ぐあぁぁぁぁぁぁ！！」

木山が突然頭を抑え苦しみ出し前に倒れる。

「お、おい！」

「ちょ…銀ちゃん、あれ！」

銀時は倒れた木山に声をかけ、シロは指を差しながら銀時に言う。

「なっ！？」

銀時はシロが指差した方向を見て驚く。

木山の背中から胎児のようで、それでいて圧倒的な威圧感を持つ化物が生まれてきたからだ。

「ギィ.ｊｗＪィａｍｇｍｙヤァァァァ.ｊｏ.ｊｇｘ.ｊａｇＪａァァｌｎｇァァｌァ.ｊｎｇｔｑァァｋｈァァ！！」

（何……？アレ……）

（せ…生物ですの？）

美琴と黒子は目の前の異形の姿を見て思考がついていけず立ち尽くしていた。

（一体、どうなってんのよ……？）

胎児のような化け物を見ながら美琴は思う。

「ギｐｍャｇｍｑｗｐｂｇァａｊｇァァァァ！！」

バキィッ！！

音とともに空中に先端が尖った氷の塊が数個出現した。

「うえっ！？ちょ……！！」

「え！？マジ……くっ！シロ、上に逃げるぞ！」

美琴と銀時は氷の塊に驚く。銀時はシロに上に逃げるように指示する。

「はいよ！『スペース』×2」

シロは近距離空間移動の亜神術を使い、銀時と美琴と黒子と木山と一緒にこの場から脱出する。

銀時達がいなくなると、その場所には放たれた尖った氷の塊が地面に刺さる。

その場に残った異形は銀時達がいなくなるとどんどん体を大きくさせた。

☆

銀時達は上につくと、聞きなれた声がしてきた。

「皆さん！」

そこには、新八と神楽の間から気絶していた初春が出てきて銀時達をよぶ。

ちなみに木山につけられた手錠は神楽のバカ力によって壊された。

「「「「初春（さん）！」」」」

初春が目覚めたことに声を上げる、銀時達。

「ん？ちょ銀さん！あそこ！」
新八は慌てながら指差した、そこには銀時達が見上げるほど巨大になった異形の姿があった。
「やはり…生まれてしまったか…」
倒れていた木山がヨロヨロしながら立ち上がり、高速道路を沿って移動する異形を見ながら言う。
「おい！あれは一体なんなんだ！」
銀時は木山にかけより異形の物体がなんなのか尋ねる。
「キミの頭でわかるように説明するならあれは思念の塊だ…」
木山は銀時にわかるようにあの異形の何かな説明をする
「思念の塊？てか頭は余計だ」
銀時は首を傾げた後、木山の余計な一言にツッコむ。
「名づけるなら、そうだな幻想猛獣ＡＩＭバーストとでも呼ぼうか……」
ＡＩＭバースト。
木山春生曰く、あの化け物は一万人近くのレベルアッパー被害者の思念の塊らしい。
「じゃあ、あれはレベルアッパーを使用した一万人近い人達の思念

の塊…」

初春はＡＩＭバーストの姿に怯えながら言う。

「おい、アンチスキルのほうに行ったぞ！？」

「見境なく攻撃してるの？」

銀時がアンチスキル方へ行きアンチスキルと交戦しているＡＩＭバーストの姿をとらえる。

美琴はＡＩＭバーストの暴れかたを見て見境なしに攻撃していることを推測する。

そのころＡＩＭバーストと交戦しているアンチスキルは…高速道路から大量の銃弾を放ち化け物に撃ち込まんでいるが、化け物は気に留めない。

それどころか銃弾で抉り取られた部分から新しい手が生えたり、体が大きくなったり、凄まじい再生力を見せ付けてくる。

「ちっ！アレ、じゃ逆効果だ！」

銀時はアンチスキルの攻撃を見て逆効果であることに舌打ちをする。

「じゃあアンタはどうしろっていうのよ？」

「とりあえずアレだ…タイムマシンでも探せ…」

「アンタに聞いた私が馬鹿だったわ…それにタイムマシンのあるところと言ったらの〇太くんの机の引き出しでしょ！」

「銀時先生もお姉さまも真面目に考えてください！」

「そうですよ、銀さん！御坂さん！今はそんなことやってる暇ないでしょ！」

アホみたいなやりとりをしている銀時と美琴にツッコミを入れる黒子と新八。

「でも、このままじゃＡＩＭバーストが原子力実験場を破壊しかねませんよ」

「「「なっ！！？」」」

初春がＡＩＭバーストを見ながら暴れ回ったＡＩＭバーストが高速道路の向こう側にある原子実験場を破壊しかねないのでないかと危険に思う。

初春の言葉に驚く銀時達、もしそうなったら学園都市に尋常じゃない被害が及ぶ。

「木山さん！あの化け物を止める方法無いんですか！」

「ＡＩＭバーストは、レベルアッパーのネットワークが生み出した怪物だ。ネットワークを破壊すれば止められるかもしれない」

新八は慌てながら木山に質問をする、木山は冷静に止めることが出きる可能性を言う。

「銀ちゃん…あの化け物を倒す方法、思いついたから一度あっちの世界に帰るね…だからあの化け物が原子実験場に近づかないように時間稼いどいて！」

「ちょっ！シロ」

シロの急な申し出に驚く銀時はシロに訳を聞こうとする。

「大丈夫あの刀とりにいくだけだから…『スペース×5』！」

シロは刀を取りにくいと言ったあと、時空間移動用の亜神術『スペース』を五回詠唱し、姿を消す。

「「「刀……？」」」

万事屋三人はシロの持ってくるものが刀であることに首を傾げる。

「あっ！あれだな！」

「あっ！あれですね！」

「あっ！あれアルな！」

三人はシロが何を持ってくるのかわかったようである。

「ちょっと、銀時先生！シロさんは一体何を持ってくるんですの！

？」

「あ？それはあの化け物をぶった切ることができるスゲェ刀だ！」

黒子の質問に銀時は自信がある表情で答える。

「木山先生…」

「キミ達か…」

初春が木山に話しかけてくる。木山は初春、新八、神楽の姿を見る。

「木山さんあなたがこの事件を起こした理由はわかりました…」

「だから私達も銀ちゃんやビリビリと同じように協力するアル！」

「木山先生！子ども達のためできることがあれば私、がんばります」

新八達も、上から木山の話しを聞いていた、新八達も銀時と同じように木山に協力することを約束する。

「聞いてたのか…だが…ありがとう…」

木山は協力してくれる新八達に礼を言う。

「銀ちゃん持ってきたよ！」

シロが手に一本の刀を持ちながら、現れる。

「おい、シロあの化け物の前まで連れてってくれ…」

銀時は真剣な顔をしながらシロに化け物の前まで連れてってくれと頼む。

☆

「ｙｃｖｂギギギギギｈｄｉｏァァァァァァァァァァァ！！」

ＡＩＭバーストは原子実験場へ近づいていた。

すると目の前に一人の男が立っていた。

「ギャーギャーうるせーな赤ん坊ですかコノヤロー」

銀時だったＡＩＭバーストの前に立っていた男は銀時だった。

「ａギャｍｇａアァｎｗアァｇｐｕａｉｕｂ！」

ＡＩＭバーストは銀時に向かって腕を振り下ろす。

ズバッ！

銀時は木刀を振るい、ＡＩＭバーストの腕を叩ききった。

次々にＡＩＭバーストから小さい腕が出てくるが、銀時は木刀でＡＩＭバーストの腕を破壊する。

銀時の攻撃がＡＩＭバーストを圧倒していく。

「ギャ@ＭＵＨＪＴァｃｊｍｖｈｊァ」

ＡＩＭバーストの悲鳴にまじって、聞こえる声。

『俺だって、』

『能力者に、』

『なりたかった！！』

「テメーらそんなに苦しかったんだな」

そして、氷の塊が出現し、氷の塊が容赦なく銀時に向けて飛んでくる。

『しょうがない、よね？私には何にも……』

『何もかもぶっ壊して…』

「……」

———ザァッ！！

銀時は凄まじい速さで全ての氷の塊を木刀でなぎ払った。

その光景に、美琴達は驚愕することしか出来なかった。

銀時はＡＩＭバーストに向かい微笑んだ。

「テメーらも頑張りたかったんだよな……」

『何の力もない自分がいやで、でも、憧れは捨てられなくて・・・』

「――――――――――うん」

銀時はＡＩＭバーストから聞こえる声に頷いた。

ＡＩＭバーストは、その巨大な腕で叩き潰そうとする。

「ｕｉｇｄｆギギギギギギギギギｕｉｇｈｕｅギギギギギギギギイイイイイイイイイイイイイイャァァァァァｇｙｉｕｖｄｈａｓｎｌｆｊｏｐｊｖｉァァァァァァァァァァァァァァァァｄｙｉｊァァァァァァｋｌｂｎ．ｄｆｏｋｘｃｏｐｖｊｏｒｌッ！！」

「だがよ…もう一度頑張ってみたらどうだ？」

銀時はジャンプしてＡＩＭバーストの腕に乗りＡＩＭバーストの顔に向かい走り出す。

「こんな所でくよくよしてねーで、テメーでテメーに嘘つかねーで……」

走り出した銀時はジャンプする。

「背筋を伸ばして生きていこうや！！」

銀時はそう叫びながら刀を鞘から抜き、ＡＩＭバーストの口の中へ入る。

『『『！！！？？』』』

この場にいた全員が銀時が飲み込まれたことに驚く。

「ギャｂｍ！？」

目を見開くＡＩＭバースト、そして…

ズドーン！

ＡＩＭバーストの巨体が砂煙をたてながら倒れた。

倒れたＡＩＭバーストがボロボロに崩れて消える。

消えたＡＩＭバーストの中から銀時が出てきた。

「あ～、何だ今の揺れ…気持ちわる」

銀時は気分が悪そうな顔をしながら口で手を抑えていた。

☆

「さすがは坂田銀時…私が目をつけたことだけはある…」

銀時の戦いを遠くで見ていた男の正体は、銀時に常盤台中学の教師という職を与えた人物『九十九一(つくもはじめ)』であった。

「では…また会う日まで…」

そして九十九は姿を消した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2894y/

とある侍の銀魂 (シルバーソウル)

2011年12月31日22時52分発行